
涙の後に…

すけあくろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙の後に…

【Nコード】

N2201G

【作者名】

すけあくろう

【あらすじ】

記憶喪失の僕の周りに集まってくる、幼馴染らしき少女や、恋人らしき少女達。ノイズに悩まされる僕は、犯罪者達から自分の命と日常を守るために戦う。嘔吐きだけと臆病者：そんな僕が主人公な、シリアスダークコメディ始まるよー。

…ヂヂヂ「いー」

すごく…きれいな声…。

女の子…？

僕の耳から頭に直接響く、…きれいな声。

だけど、不愉快な音でかき消されてゆく。

目の前は…真っ暗。

暗闇の中に、きれいな声と、不愉快な音だけが響き渡る。

「誰…？」

ヂヂ…ヂヂヂヂヂ

音のせいで、自分がちゃんと声を出せたか不安になる。

「あ」ヂヂヂヂ…「た！」ヂヂヂヂヂ

嬉しそうな…声？

どこか懐かしく…響き渡るような声。

不愉快な音よりも、ずっと頭に残る声…。

ヂヂヂ…「だよ!」…ヂヂヂヂヂヂヂ「よ!」ヂヂヂ

徐々に…聞こえてくる…声。

「だ…れ…?」

少しづつ、あの音が減ってくる…。

「わた」ヂヂヂヂ…「だよ!」ヂヂヂヂ

ああ…きれいで、可愛い声…。

絶対、女の子の…声だ。

「わたし」…ヂヂヂヂヂ「よ!」ヂヂヂヂヂ

ああ、そうか…”わたしだよ!”…だ。

何度も、何度も…自分を認識させようとしてるんだ…。

…誰に?

…僕に?

え?...僕って？

ぞくり、と...耳が引きちぎれた気がした。

!...ふいに、音が大きくなる...声も、大きく、どんどん、どんどん、大きく大きく大きく。

ああああああああああああああああああ!

ああああああああああああああああああああ!!!!

ああああああ...ああああああああああああああ!!!!

!!!!!!!!!!

な...んだあ...こ...!!...こここ...れ...あ!

痛い、苦しい。音が、音が...

デデデデデデデデデデデデデデデデ!!!!!!!!!!

ヂヂヂ……

あぁっ…っは…く…。

音…苦し…やだ…。

音…。

「起きて！わたしだよ！！」

「あぁっ…かはっ…っあ…？」

はっ…っは…。

肩が、上下するのが分かる。

苦し…あぁ…。

音…止まった。

力が抜ける。

…眩しい。

あれ？…真っ暗じゃ…ない？

…目の前に、すごく可愛い女の子が居る。

ああ、この子があの声の…と、無条件で認識した。

1頁…記憶喪失

ああ、晴れやかな朝。

いいなあ、こういうの…。

ずっと憧れていたんだよね。

「あ、千知^{ちち}くん、起きた？」

「うん、あー…うん」

そうそう、実はね僕の名前は千知^{ちち}と言うらしいんだ。

千を知ると書いて千知。

…いやー、親の過度な期待が分かっていい名前だね。

ヂヂヂ…ヂヂ

またあの音だ…。

…ノイズと表現するべきなのかな。

うん。突然だけど、ここで自己紹介でもしておこうかな。

いや、別に読者とか知らないよ？そんな天の上の存在なんか知らないよ？

で、僕の名前はさっきも言ったとおり千知^{ちち}。

身長は多分175くらいだったらしいけど、どうやら165らし

いね。

体重はヒ・ミ・ツ。

うん、後どうでもいいことなんだけど、僕は何かの理由で記憶喪失なんだった。

でー、今は何をしてるかって言うと、病院でニート生活ってところかな。

一応成績はトップクラスだったらしいし。

あ、そうそう、何で僕がこんなに明るいかって言うとね、暗すぎると大変なことになるからだよ。

皆だって、暗い主人公よりも明るい主人公の方が好きでしょう？

それと、あそこにいるのが…えーつと…

「えーつと…百藻^{ももも}さん？」

「もう、いい加減幼馴染の名前くらい覚えようよ。なーに？」

ああ、百藻^{ももも}さんです。

きれいな声の可愛い女の子。

何と僕の幼馴染なんだって！やったね！

「いや、何でもないよ」

「もう…。そうだ、リンゴいる？」

「いるいる、多分リンゴは好きだったと思う」

あー、記憶喪失って意外と楽しいねえ。

誰だか知らない人が世話を焼いてくれる感覚は他では味わえないね。

ヂヂヂ：ヂヂヂヂヂ

あー、ノイズうるさい。僕が話してるんだ邪魔するな。消えて消えてなくなってしまう。

「はい、リンゴ」

モモちゃん（脳内ニックネーム）が僕にリンゴを渡してくれる。
…わお、可愛いウサギリンゴだよ。

「おいしい？」

モグモグ、シャリシャリ、ヂヂヂヂ。

何か変な音混じったかな？気のせいだよね。

「おいしいよ」

うん、甘いようで酸っぱくて、そのくせ味が薄くて…実に季節外れだ。

一通り食べると、手がベタベタ。

何故かベッドから起き上がろうとすると怒られるので、シーツで拭こう。

決して面倒なわけではないんだ。

「ほんと、千知くん明るくなったね」

「あはは、百藻さんが知ってる僕がどんな僕かは知らないけどね」

「あはははは」

あはははは、ぐりぐりと抉るように打つべし！って？

あは、いってー。

「あ、そういえば、千知くんも2学期からまた学校来るんだよね？」

「うん、また学校行くよ」

…あはは、いい加減まじでいってー。

ヂヂヂ：

うっさいノイズ。お前うるさい。今機嫌悪いんだよ、僕は。

あー、ノイズごときに八つ当たりするとは、僕も落ちたものですか。

「あ、そろそろ面会時間終わりじゃないかな？」

「ほんとだ！…じゃ、また明日ねー」

モモちゃんは元気に手を振って、

「はいはい、じゃあねー」

僕は何故か軋む右腕を弱弱しく振って、お別れする。

ああ、悲しいなあ。彼女と明日まで逢えないなんて。

悲し過ぎてよく眠れそうだ。

コンコン

ん？何の音だろう。

コンコン

ああ、扉に何かが当たってるんだ。
コンコン！

んー、ノックの音って奴かな？
コン！ゴン！

どうしようかな、…眠いなー。

「面会謝絶チューです」

よし、寝よう。

コンコン！！

ヂヂヂヂヂヂ：

あー、残念ノイズがうるさくてノックの音が聞こえないや。

当然誰かが来たなんて気づけてないって。

じゃ、おやすみ。

2頁：病院の過ごし方

デデデデデ：

あー、ノイズうるさくて眠れないー。

いつそこの耳引きちぎろうかな。

ちよっと痛そうだけどね。

…ちよっと？

いや、大分痛いかなー。

あー、眠い。

お？ガチャリ…って何の音かな。

例えるなら、患者のプライバシーの化身ともいえる鍵を開けたよう…。

ん？ガダアアン！って何の音だろう…？

…まるで病院の扉を強引に開けたような…。

「いい加減開けなさいよ！」

扉をあけて入ってきたのは、2週間程お世話になってるナース（本名はどうでもいいので割愛）さん。

どうでもいいけど、言葉づかいが悪いことで有名な人：僕の間でだけ。

「面会謝絶チューです」

「黙れ！」

おー、患者の意思を全く持って尊重しないナースさんだなー。

「まったく、そもそも看護師に対して面会謝絶も何もないでしょう」

ごもっともな意見だなあ。

あ、そうそう勘違いされると彼女の職を奪う結果につながる可能性があるがあるので訂正しておく、最初は普通の言葉づかいだったんだよ。ただ、僕がちよっとからかい過ぎただけなんだ。

ヂヂ：「てるの？」

ノイズうつさい。ナースさんが何を言ったか聞こえなかっただろ。

「ほら」ヂヂ：「さい」

なんか、ノイズ反抗期？…うるさいー。

「早く立ちなさいって！後、子供じゃないんだから黙れって言われて黙らない！」

「え？僕もう立てるんですか？…後、えらい人の言うことは聞くものです！」

「立てるから、早く立つ」

おお、なんと…僕は立てるのか。

…知ってたけど。

頭から足に向かって電気信号をとばす。

指示は　ウ　ゴ　ケ。

…動く気配がない。ボイコットかな。

「立てません」

「ほう、じゃあ立てるようになる注射をしてあげるから。…眼球に」

おお、足が動いた。

ジタバタジタバタ

「早く立ちなさいな」

ジタ…バタ、ヂヂヂ

変な音が聞こえて不愉快になったので、足を横に向けてベッドに腰掛けるようにする。

…で、立った。立ったよ僕！やったよ！

「はい、どいて。邪魔」

「すみませーん、チェンジで」

「ここはキャバクラじゃないの。ほら、どいてどいて」

狭い部屋の隅っこに追いやられる患者。

訴えるぞ！患者の権利を守れー！

ナースさんはベッドのシーツを取り替えて、シワを伸ばす。
：自分のシワは取り替えられないし伸ばせないらしいけど。

「うん、死ねば？」

「それ、患者に対することばと違います。後何故ですか」

「さあ？言いたくなっただけ」

何のエスパー？

っと、あつという間にベッドが新品のように！

「はい、どうもありがとうございます。ではそろそろお引き取り
ください」

「何バカなことを言ってるの。出ていくのはあなたです」

「嘘ですよね？」

「うん」

はー、よかった。

こんな居心地の良いベッドは他にないよ！
うるさい見舞いとうるさいナースと固いベッド！サイコー！

と、ナースさんが手まねきしてる。

「ほら、ちょっとおいで」

なんだろう。イケない大人の授業かな？

ヂヂヂ：

ナースさん、僕僕…。

安心して、全部私に任せればいいの。

でも…ああ、やっぱり僕！

うふふ…ほら、ここ、こんな…。

ああ！禁断の恋！

何だこの電波。

っと、忘れるところだった。

こんな展開を期待しつつ、早くナースさんのところに行かなければ
ー！…嘘が6割だけど。

「早くこいつての！」

怒られるとは…。

「ひどいよ…僕…頑張った…「あっそ」…のに！」

おい、人の発言は待つものですよ、ナースさん。

「まったく…、髪の毛に綿ついてるわね」

おお、しなやかな指づかいで髪についた僕の白いものを取る。

「…変なこと考えてない？」

「めっそももない。基本的には考えてませんよ」

うん、僕は状況を分かりやすく、説明しただけだものね。
やましい気持ちだって全くないよ！

「ま、いいわ。…じゃ、私は出ていくから、何かあったらそのナースコールで呼びなさい」

「はい、女王様」

「黙れ。…じゃ、お大事にね」

…うん。ナースさんはあっさり出て行った。
とくに変な展開も無かった。よかったよかった。

…あー、よかった。

うん…寝よう。

べ…別に期待とかしてないからっ。

あー、このベッドをあのナースさんが直したんだなーとか思ってたな
いから！

別に、あのナースさんが22歳で若くてきれいでちょっとロリ入ってて萌えるよ。

とか…思っていないから!!

「…ベッド汚さないでね？」

きゃあああああ!!

わきゃあああ!

誰? 誰? 誰?

ナースさんかよ!

くっそ! ベッドちよつとだけ見つめてただけなのに!

「…別にそのベッド何もついてないから」

ああああああああ!

こい! ノイズこい!

僕の全てを包み隠せえ!

今度こそ本当にナースさんが部屋から出ていく。

鍵かけろーよー。

…寝よう。

ヂヂヂヂヂ…ヂヂヂ

いや、ノイズ遅いから。寝ようとしたら出てくんな。

お呼びじゃないんだよ。

よし、寝よう。枕につつぶして、ちよつと濡らす感じで寝よう。

…ノイズとともに。

3頁..深夜

ヂヂヂヂヂヂ：

…ヂヂヂヂヂヂ…ヂヂヂヂヂヂ

ヂヂ…ヂヂヂヂヂヂヂヂ

ヂヂヂヂヂヂ……ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

ヂヂ…ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ！！！！

あー、うーるーさーいーなー。

これって、夢だね？

あー、目瞑るのいやだなー。

でも、瞑らないと眠れないしね。

ヂヂヂ…ヂヂヂヂヂ

…目を瞑ると毎回毎回ノイズがひどくて困るよ。

可愛い女の子の顔でも出てくれば、夢も楽しくなるのになあ。

…可愛い女の子？…何それ。

ヂヂヂヂヂヂヂ！

あー、そうか、例えばモモちゃん（それ以外の同年代とまだ会ったことがない）とかかなあ。

ヂヂ…ヂヂ…

んー…ノイズうつせ。

ヂヂ…ピピピピピ！…ヂヂヂ

ノイズにノイズが混ざってるよ。

あー、目ざまし音かー。

起きようかなー。

よっこらせつと。

うーん、眩しくない。

だって、夜だし。

あー、時間は…3時？

ヂヂヂ…ヂヂヂヂヂ

おい、ノイズ…分かってる？お前のせいで僕は眠れてないんだぞ。

あー、眠れねー。

…暇だし。

散歩でも…しようかなあ。

僕は自分の足で立って歩くことができる、普通の人間だと知らされたわけだし。

…よし！思いついたら即実行！

あー、…暗いなあ。

よいしょ…、布団おもー。

ガラガラ…なんか、夜って扉の音がやけに大きく響くよね。

ペタペタペタ…ヂヂヂヂ

スリッパの音も響く響く。

…ノイズは僕の頭の中だけで鳴ってる訳だから響かないけどねー。

いや、響くか…頭の中で。

…さ、どこ行こうかなあ。
ここ、病院だし。

定番の屋上かな？

えーっと…あっち？

違う、こっち？

あ、屋上はあっちですか。すみませんね。

…今の誰？

階段を一段上ってまた、一段。

…微妙に疲れる。

さあ、扉を…開けます！

…開きません！

んー、やっぱりだめかなあ。

入院したら屋上に行くのが通ってもんだろ！

…痛じゃねーよー？

…あ、開いた。

そうか、押す扉なんだね！やったあ！

…さーむーいー。

ヂヂヂヂ…ヂ：

ノイズは元気だな畜生。

「…こんばんは」

「あ、こんばん…は？」

え？先客？

えっと…今何時？

「…誰？」

「ああ、僕は」…ヂヂヂ「って言うらしいよ。…じゃなくて、前川千知って言うんだ…ってかそっちこそどなた？」

正直、暗くて顔すら見えないんだけど。

…声から察するに女性ですね！

「私は…」…ヂヂヂヂ「す」

…おい、肝心なところ聞こえなかったぞ。

「ごめんなさい、風で聞こえなかったのもう一度…言ってもらってもいいですか？」

「…来栖」ヂヂヂ「です」

…名前っぽいところ聞こえねー。
ま、いいけど。

…脳内ニックネームはクルクルさんに決定だな！

年上っぽいし！

「えっと…クル…来栖さんはどうしてここに？」

「白血病なんです…」

おーい、ちげーよ。

ってか、嘘だな…分かるよ！

「…へえ、でもそうじゃなくてですね」

「あれ？…嘘には突っ込んでくれないんですか？」

「あ、どうでもいいので」

「…そうですね」

…あー、話噛み合わない。

いや、噛みあってるのかな。

どうでもいいや。…多分気にしない。

「…学生さん？」

「ああ、学生兼ニート兼患者です」

「あら…じゃあ私と一緒にね」

おー、同類だ。

「…あなたもニートを？」

「あ、…一緒にしないでください。「おい」…学生兼患者ですよ」

…声に何か込められてたっ…。

あー、寒っ。

「…中、入りませんか？ここ、寒くて」

「そうですよね、…何でここに来たんですか？」

「だから、白血病…です」

「それ、もういいから」

うあー、会話し辛い。

どうしよう、…ノイズこーい！

ヂヂヂヂ…

くんな！

「…じゃ、降りましょうか」

クルクルさんと連れだって階段を降りる。

…扉を開けるのに失敗する辺りは面倒なので割愛。

「ロビーで少々お話に花でも咲かせませんか？」

「いいですね、…ああ、座りましょうか」

ロビーのソファ―？に座る。

「しかし…寒いですね。チチチさん、ホットココア飲みたいです
よね」

「あ、チチチじゃないですよ、千知です。あと、別にホットココ
ア飲みたくないですよ」

うん、チチチって、ニクネームセンスが僕と似ている。…だ
めだねえ。

ってか、それを表に出すんじゃないよ！傷つくよ！…多分。

「寒いすねえ…チチチさん。…ホット飲みた…ないですか？」

「…チが一個多いです。…自販機はあそこですよ」

「…あー、ホットココア飲みたいなー」

「露骨過ぎませんか」

「…あー」

…分かった、分かりました。

無言で立ちあがり…自販機の前に。
ボタンを押す…ホットココア？

あれ、おかしいな、出てこないぞ？

「駄目ですね。この自販機壊れてるみたいです」

「壊れてるのは別のものですよ…お金入れないと出てきませんよ?」

おお、そうか。

壊れているのは僕のナニのアレのソレか。

あはは…くっそー。

「はあ、クルク…来栖さん、お金だけ入れてくれませんか?」

「だって何ですか?…後、クルクルさんじゃないですよ?」

良く分かるねえ。脳内ニックネーム。

もしや、定番のニックネーム?

てか、お金はー?

「いや、お金入れないと出てこないらしいじゃないですか」

「奢ってください」

「…露骨ですね「はい」」

即答が半端じゃないな。

あー、何?ここはおごる場面なの?
しかたないなー。

お財布お財布…あ、ありやがった。

中身は…110円？

おい、ホットココアいくら？

…110円？…あれ？

「早くしてくださいね…」

…ガチャガチャ…ポチ。

ウーーン、ポトン、トポトポ…ヂヂヂ

お、ホットココア出てきた。

…おかしいな、僕の財布が空っぽになった。

「持ってきてください…」

「あなた様はどこのお姫様ですか？」

「病院のマドンナです」

あっそ。

ヂヂヂヂヂ…ヂヂヂ…！

ごめんごめん、スルーした訳じゃないんだ。

…ただ、反応面倒くさかったんだよ、…だからうるせーよノイズ。

さて、持っていこう…っと予想以上に熱い。

危ない…こぼしてしまう！

「あ、こぼしたら裁判沙汰にしますね」

「はい、どうぞ」

おお、こぼさずに済んだ。

…なんでーだろー。

「…あったかあい」

「うっぜー」

「何か？」

「いえ」

…くっそ、寒いな。

あー、…ってかこの人きれいだなー。

「あの、失礼ですが、学生さん…？」

「はい、高校2年生とかやってます…ズズ」

…あー、いいにおい。

ただし、この人の匂いじゃなくてホットココアの甘い香りだ勘違いするなよ。

…決して断じてこの人の匂いがちょっぴり漂ってきたとかそんなことないから！

ヂヂヂ：

うっせー！

「ああ、実は僕もなんです」

「ズズ：」

興味持てよ。

：後、せめて返事くらいは言葉で返せー！

「おいし、：ああ、お腹いっぱい」

それはようございました。

「：残ったの、あげますね」

「ありがとうございます」

おいおい、元々僕のお金だし、ついでに言えばお前はどこのわがまま娘？

：おっと、言葉づかいがっ。

ホットココアを受け取る：熱い。

クルクル：ちよっとだけ回す。

ホットココアが一番多く付着している部分から：飲もうかな。ほら、他のところから飲もうとするとちよっとだけ損するし。

損とか、嫌いだし、エコだし。

「…間接？」

「はて？何のことやら」

…わきやあ！

ヂヂヂ：

だからうるせー！毎回毎回毎回邪魔スンナ！

「…かんせ」「あー、このホットココアおいしいですね。あったかい」…キス」

わきやああああ！！

僕は純粹なんだ！そんな、そんな…！

「…別に味変わったたりしませんよ？」

「…ズズ」

さ、さっきのお返しだい！

「…後、カップはちゃんと捨ててくださいね？」

「当然じゃないですか」

…何を言ってるんだろ、この人は。

あー、分からないなあ…ヂヂヂヂヂ…邪魔スンナ。

「あ、そろそろ私眠らなくちゃ。…じゃあ、また今度学校でお会いしましょうね、チチチチチさん」

「はいはい、クルクルクルさん」

「クルクルじゃないんですか？」

「さっさと眠れ」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

…僕も寝よー。

…あれ？どっちだっけ。

えーっと、…ああ、こっちかな。

ガラガラ…

「…何でついてきてるんですか？」

「や、やだなあ、ついてきてなんか」

「…部屋間違えたんですか？」

「まさか、そんな事」

「…貴方の部屋は隣ですよ？」

「あはは、分かってますよ…女性を一人にしたら危ないかなって」

「おやすみなさい」

「おやすみなさい」

…さー、寝よう寝よう。

…ガラガラガラ…

…いいにおいしたなあー、あの部屋。

とか、思っていないから！

…寝よう！これ以上起きてると何か大事なものを失いそうだ。

ヂヂヂヂヂ…

…だからうつせー。

そういえばそうだった。

ノイズのせいで眠れないんだっけ。

…あー、前の僕は一体どうしてたんだろうかなー。
体力もたねー。

…おやすみ。

ヂヂヂ…

だまれウジ虫。

おやすみ。

「…どうしましたか？前川さん」

「いえ、何でも。ちょっといい夢気分だっただけですよ」

「そうですか。…何かあったらナースコールで呼んでくださいね」

「はいはい」

ナースさん退場。

スツキリしたー。

あ、ちなみに言っておきますと、あのナースさんは毒舌ナースさんとは違いますよ。

言葉の優しさが違うね！

うん。…スツキリ！

ヂヂヂヂ…ヂヂ

さいあくー。

今更だけど…眩しいなあ。

っと、辺りを見回すと…目につくのは…紙コップ？

あれー？あんなものあった…っけ…

っておいしいー！！

まてまてまてまて、これは罠だ。

そう、これは罠だ……ヂヂヂ……うるせー……！！！！！！

えーっと、あれがこうしてそれが……あああああ！

そうだ！　そうか！

それだああ！

ってか、テンション落ち着け！僕！落ち着け！

そうだ、夜あれ、捨て忘れた、僕。

忙しかった…んだ！

あらああ。

まあまあ。

で、済んだらいいなあ。

「……ミッシェーインポッシブル！」

そう、これは重大なミッションだよ。

誰にも（とくにクルクルさんに）ばれずに……あの紙コップを捨てなければいけない……っ。

じゃないと……僕の選手生命が絶たれる。

…何の選手だ。

「∴略してミツヨンインポですね」

「…おい」

わきゃああああ！！

誰？誰…ってこのパターンかよ！

「クルククク…じゃなくて！来栖さん、変な省略の仕方しないでください」

「…いいじゃないですか、インポ」

「…最悪だー」

「うふふ…ああ、その紙コップを私にばれずに捨てようとしていたんですね」

わきゃああああああ！ヂヂヂヂ…
うっせいやい！

「な、ち、ちが、ががが」

「どこのポンコツインポですか？」

「おい、それ違う意味で使ってませんか」

「気のせいですよ」

くっ…また、まただ…また人生の汚点を。

「あらあ…この紙コップまだとっていられてたんですね…私とあ

あなたの…思い出」

「てか、あなたいつ入ってきたんですか」

…今何か別の事話してましたっけ？

「…ええ、いつの間にか」

「はあ、そうですか」

…あー、神出鬼没はいやだよ。

ったく、プライバシーを尊重してよ。

「あれ？あいてるー…千知くーん」

おや、きれいな声ー。

この声は…キラン、モモちゃんだね。

あっは、声ソムリエとかいってー。

「…あら、おはようございます」

「おはようございます…って…どなたですか？」

「来栖」ヂヂヂ…「と申します」

どうあっても僕に名前を聞かせないつもりかこのノイズめ。

「へ…へえ…どうしてここに？」

あー、僕の居ないところで勝手に話が展開してるよ？

ってか、いつの間にか僕は●○ゲの主人公みたいな三角関係になっただろー。

ヂヂヂ：

ごめん、ノイズの嫉妬とかいらねー。

「…あの夜のことが忘れら「だまれ」て…」

何をさらっと言ってんだこのクルクルさん。

「あの…夜…の…っ…こと！？」

「ええ…」

「あの一、百藻^{ももぢ}さん？…勘違いしてませんか？」

「っ…わたしは！…千知くんの幼馴染です！」

「へえ…私は同じ屋根の下で眠った仲ですよ」

「な…なん…！」

ちょ…誤解…だよ。

あー、それにしてもきれいな声ーだーなー。

「あの、病院だから、屋根の下当たり前ですから」

「あら…そうでしたか？」

「くっ…千知くん！わたしもここで寝るよ！」

「余計に話がこじれるからやめて」

「そういえば…夜中私の部屋に…」

「黙れ」

「ちょっと！…今のナニ？千知くん…？」

「あー、もー！」

ヂヂヂ：

だからノイズにかまってる暇ないんだってば！

ヂヂヂ…「で」…ヂヂヂヂヂ

「あら」ヂヂヂヂ…ヂヂヂヂヂヂ

き・こ・え・な・い・し！

ノイズ邪魔、うるさい、邪魔だつての！

「千知くん！聞いているの？」

「うん、ああ、パスタおいしいよね」

…いい訳ですらねー。

あ、分かりづらいかな。言い訳ね、言い訳。

「…うふ、聞いてなかったんですね、じゃあ、それで良しとしまし
よう」

「よくないから、あなたの言ってること全部だめだから」

「もう…私と貴方の仲じゃないですか…」

「他人です」

「…親しそうに…っ…して!」

やっべー、どうやってこれ収集つけるんだろ。

「前川さーん、女の子をはべらかしてないでとっとと出てけー?」

「うるせえええ!」

ナースさん（毒舌の人）まで出てくるな、ややこしい。
ひっこんどけー!

あー、忙しい、ヂヂヂ…

うるせー! なんとなくノイズが出てくる予感はしてたけどさ!

「…前は…千知くんこんな人じゃ…なかったのに!」

「そうよね…前はもっと優しくて一途で…」

「そう!…ほんと…」

それはどこの色男だ。

ってか、毎回毎回ぐさぐさぐさ…いってー。
ほんと、いってー。声がきれいで顔が可愛いからって何だよ！

「ぐすん…もう…チチチチくんなんて知らないっ」

「あっそ」

あー、はいはい。

モモちゃんはそんな呼び方しませんから。

「ひどい…そんな事…」

あれ、これどっち？

えーっと、…ああ、声まね上手いな。

…このクルクルさんめ。

「わたし…」ヂヂヂ「る！」

おい、ノイズ…大事なとこだぞ。

タタタ…って、ああ…そうか。

” 帰る！ ” か。

はー。

「私も…帰る！…あ、コップはちゃんと捨ててくださいよ？」

「いいからさっさと、どっか行ってくれますか」

「はい…今、行きますね…」

「行け」

トテトテ…

あー、扉閉めろー。

ボタン！

…つつかれた…。

おい、これ…続くの？

あー、眠い…なあ。

ヂヂヂ…

うる…せ。

やば…本気で…眠い…。

…気がする。

あ…ベッド…もふもふ。

…寝よ。

おやすみ…ヂヂヂ…
うっせ…。



5頁：突然ですが、非日常

…おいで。

おいで…。

おいで…おいで…。

…どこにだよ。

ヂヂヂヂ…

おいで…ヂヂ…で

だから…どこに…？

ヂヂ…いで…ヂヂヂヂヂ…

どこにつて…？

おいで…ヂヂヂ…おいで！

んあー、いい夢ー。

最近…つってもまだ記憶喪失から一月も経ってないけどねー。

ともかく、最近こんな夢ばかりだよ。

悪夢…っていうのかなー。
毎回毎回毎回不快な夢。

さて、そんなことはどうでもいいんだけどー。

今、問題なのはー。

…お医者さんがお医者さんごっこやってることだからねー。

あー、そうだな。今の状況を例えるなら。

怪しい女の人（お医者さん…田中さんだっけ）が、メスによって
僕の体を切ろうとしている感じかな。

ちなみに僕はベッドに寝かされている感じかなー。

…あ、今疑ったろ。

でもねー、これ、医療現場の様子じゃなくてー。

…まじでメス振り回した危ない田中さんが僕をぶっ殺そうとして
んだよね…。

いや、意味わかんねえー。

何で、こんな状況？
何、僕狙われてるの？

いやいや、いらねーよ、その設定。

どーでもいいー！

デデ…

うっせー！

「ねえ…いい加減死になよ」

「あっは、やですよー…っち！」

うおっと！

あー、切れた。
ちょー、切れた。

…いつてー。

ってか、いい加減ってなに？前から？前からなの？

いつからだよ！

て、血…ドバドバじゃん。

…あああああああああああああああああああああ！
!!!!!!!!!!!!!!

アアアアアアアアアアアアアアアアアア!

いってえーよ! ふつーに!

ヂヂヂ…ヂヂ…

今かまってる暇ないんだよね…!

「つー、痛いなあ…それでもお医者さんで…すか?」

「へえ…君は痛みを表に出さないタイプか…くく、それはそれで」

「変質者…が」

あっは…あー、くっそ。

●○ゲの主人公おとなしくやってればよかったああ!

こんなサスペンス展開…い・ら・な・い!

…ヂヂヂ「よ!」

…あー、何言ったとかどうでもいいー。

とりあえず、…痛いの…やだなあ。

あ、そだ、ナースコール…

「クク…今、皆休憩中さあ…ついでに、ナースコールは私が切っておいたよ」

あー、くっそー。

ってか、どうしようかな…。

「ほら…血が出てるじゃない…治療してあげるからさ」

「うっそー」

ブン！っと音がした気がする。

ともかく、メスを本来の用途ではない使い方している田中さん。
…美人が…台無し…っだよ！

おっと、…あぶな…！

どんどん追い詰められて…って、後壁かよ！

「あらー…くくく、どうしようか。後が…ないね？」

「あっは、っー…」

あー、やべー…地味に痛いんですけど。

お腹から血がドクドク…。

あれ、けっこーやばい？

おいおい…だから…ヴァイオレンス展開…いらねーよ。
期待してねーよ。

…さて、どうするかなあ。

とりあえず、サクッと状況確認。

…足元にはベッド、後は壁、右は壊れたナースコール。
左は花瓶、…正面はキチガイ美人。…その向こうに栄光の扉。

…きつくね？

「くく…君、この状況でも冷静なんだねえ…」

「あれ？僕って心の声漏れてるタイプですか？」

「まさか、…顔に出やすいだけだよ…冷静な顔だ」

「あっは、かだいひよっ！」

ごろごろ…

ベッドから転げ落ちる。

おおおあああ！？

やっべー、きてるきてる。

今、あの人…！あの人メス投げたよ！？

やべーよ、おいおい。

てか、頭ぶつけたし…いてえ。

「抵抗とか…やめたら？」

「やですよ…」

…花瓶を思いっきり…投げ…投げ…。

ガシャアアアン！

あー、重いし！あー！体衰弱してんじゃない！

「くく…あは、昼間から殺人とか、ゾクゾクするね」

「変態…っすかー！」

「かもね…」

ゆらりと、…変態美人殺人鬼の体が揺れ…て。

あれ？…メス、目の前…あれ。

死ぬ。

死ぬ。

ああああああ！！！！

おい、変態は認め…と。

って、違う！そうじゃなくて！そんな事考えんな！僕！

あ。

…避けたのにー！

いってー！

…肩にグッサリ…いや、刺さったりとか、ないから！

「赤くて…きれいだよ…ゾクゾクする…」

「あああああああああああ！くっそーがー！」

「……まだ冷静か」

「どこがだああ！」

ヂヂヂ…ヂヂ…ヂヂヂヂッ！！

ああああ…あ…うっさ…また…うるさ…。

こんなときに…ノイズ頑張んな！

うるさい！痛い！熱い！

ああああ！もう、どうでもいいiiiiiiiiiii！

「かかってこいやー！」

「おっけー」

ブン！

「うそうそ、今の取り消し、って…あが」

ブン！

あー、くっそ、メス振り回すんじゃないよ！

ゴロゴロ…ってどんだけ必死？

生きるのに必死？

あー、くそ、いつから僕はそんなキャラに。
てきとーに、てきとー。

…誰か助けてー！

「くく…無理無理。せめて私をどかさないと…逃げられないよ？」

「…あっそ」

…痛い、熱い、うるさい…ヂヂヂ…だからそれうるさい。

…もう、どーでもいい。

「あー、右肩痛い。左脇腹痛い。ついでにあんた…うざいよ」

「くく…で？」

「お前が死ね」

もういい。

「うわあああああああああ！！！！」

タツクル。

猛然と、勇猛果敢に。

技術の粋を究めた、超すげー切れ味のメスに…。

…素手で立ち向かう？

「くく…そうこなくっちゃ！」

ズッ！…メスがどっかに刺さった気がする。

…血あつたけー。

あああああああ！いってー。
で？

「おあああああ！」

そのまま、タツクル継続。
押し倒す。

美人を押し倒すとか言ってる余裕ねー。

「いってええんだよおお！！！！」

「んなっ!？」

頭突き。

頭を使え、頭を。

何度も、何度も、…もう、痛いとかどうでもいい。

「くっ!このっ!」

…あー、何か、背中にメスがもう一本刺さってる感じ。

何本メス持ってたんだ、こいつ。

いってー、あっちー、うっせー。

…ヂヂヂ…

思い出したように…出て…くん…な!

「あああああああああああああああ!」

「ひっ!…なんてね」

…顔が頭突きで潰れて、頭血まみれで、きれいな顔ぐちゃぐちゃで、鼻多分折れてんな…いてえーだろ。

もう、いいじゃん。…くそめ。

…ちーくしょー、腕に力はいんねー。

…とまあ、足にメス刺さったし。

…なんか、お腹からメス抜いて、刺して、抜いて、刺して。

…何の愛情表現だよ。

「…いって…」

「ほう…そろそろ痛みを感じてないのか…くく」

「あああ…うつせ…変態…ノイズめ…うつせ」

「ノイズ…？はて…まあ、そろそろ…死ねばいいね」

大きく振りかぶって、首めがけて…メスが！

きったーーーー！！！！！！

ヂヂヂ…ヂヂヂヂヂヂ！

もう、ノイズとか気にしねー、…全力で…横に転がる。

あー、マウントポジションがあ。

「ちっ！」

空を切るメス。

あー、こええええ！

ヂヂヂ…

ああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！
もう、ノイズなんなんだよ！

こんなときまで、こんなときまで！

折角痛いの我慢してんだ、邪魔スナ。

気が散る、っつかいっつかい、熱い！うるさい！

デデデ：ああああああああああ！！！！！！！！！！

「ああああああああああああああああ！！」

心の叫びが漏れ出す、漏れて溢れだす！

…いって…。

まあ、…ああああああああああ！！

「っち…！逃がすか！」

絶叫しながら、痛くて熱い体をごろごろ転がして無様にたどり着く…脱出への道。

「くく…逃がすかあ！」

そして、あの人気づいてないなー。

…僕の背中メス…貫っちゃった、エヘ。

手の中に、…ちよっと手が切れてる気がするけど。
隠し持った…一本だけのメス。

「死にな…よ！」

「あんたがね」

ずぶり…と刺さる、もっかい右肩。

だから？

いい加減、この痛み、も熱さ…も、慣れてきたよ？

ヂヂヂ：

お前ははなっから慣れてんだよ！

「あっははっはあははあああ！！」

近づいたああ！

何事？みたいな顔してすっとぼけてんな！

…あーーーーー、痛いの痛いの…あいつに飛んでけー！

「え？」

ズブリ…刺さるメス。

刺された右目。

…あの人の。

変態美人殺人鬼…あ、今はそんなに美人じゃねーなー。

の、み・ぎ・め。

そう、右目右目右目。

あああああああ！！

きつもちいーーーーわありりいいい！

ぐにゅって、ぐにゅっていったあ！

きつもー！

あああああああ！！！！！！！！

刺す方が刺されるよりよっぽど苦痛！

痛くないけど、苦しー！

あああああああああ！

ヂヂヂ：

ヂヂヂヂヂヂ：ヂヂヂ

「ぎゃあああああああ！！！！」

「もーちょっと、品のある…叫び声は出せないんですか？」

…メス放置。

実は、僕、左利きなんっすよー。

だから？って話ですけど。

変態…もうめんどくせー。

とにかく、あいつの顔面を…蹴り飛ばす。

のっかってくんない、気持ち悪い。

「ぎゃああああああ！！！」

「黙れよお…あー、…いってー」

ヂヂヂ…ヂヂヂヂヂ！

もうー、どうでもいい。

ずるずる…あ、そろそろやばいな。

…ずりずりと、体で扉をスライド。

鍵かけ忘れてよかったー。

ちよつと隙間ができる。

「ぎゃあ…あああああ！」

…叫ぶな…さて…逃げよ…って…あ？

グサリ。

とでも表現すべき？

なんか…メスぶんまわして…刺さった。

…誰に？僕に。

…どこに？背中に。

…どこら辺？…なんか、やばそうな…肺のあたり？

「ゴホッ…ゲホ…ボツ…ガ」

「ああ…あ…」

何か…口から…血？

あー、いつて…血？

きんきゅうにゅーいんがひつよーです。

…ってか、ここ病院ジャン。

今お昼？知るかよ、助けに来いよ。

…何か、冷静。

走馬灯？何それ。

…走馬灯に見るような思い出何一つねーよ。

プツ。自分で言ってて笑えないー。

「ああ！…あ…」

つつ…あ…だめだ、目がかすむ。

っつか、勝手に気絶してんじゃねえよ…。

お前のせいで僕は気絶すら出来てねえんだよ。

痛すぎて。

目刺されたぐらいで気絶とかふざけるな。

ヂヂヂ…ヂヂヂヂヂヂ

好きに鳴り響けよ、ノイズ。

もう、好きにしろよ。

あー、いつて…。

「ごほ…」

…おい…やばいんじゃないの？

血いっぱいだよ。

あ、何がやばいって言うとき。

…この部屋、呪いの部屋として使われなくなっちゃうんじゃないのーって…。

あー、お別れ？

…早すぎ。

ってか、防音うぜー。

隣の部屋…のクルルさ…ん。

おい、あの人に頼るの？

仕方ないじゃん。

…あー…。

扉…頭一個分あいてるな。

…僕の頭挟まってるし。

さー、それじゃー、いってみよー。

いち、…にの…

「…誰かーーーーー！…って」

おいおい、あの人…叫ぶようなキャラかよ。

ヂヂヂ…ヂヂヂヂ…ヂヂヂ…

ノイズーともおーわかれー。

あー、意識、手放す。

…手放す…。

もういいや。

クルルさん。任せた。

…寝よー。

…寝る？

永眠ってやつですか？

ヂヂヂヂ…

グンナイ…糞野郎。

6頁..やっぱり非日常

…デデデデ

デデ…デ

うあー…ノーズー。

きてますねえ。

いや、あー。

デデデデデデ…

つー、なんか、全身動かないー。

あ、これ、あれですかね。

金縛り体験？

わーお、初体験。

…いや、もしかしたら前の僕は体験してるのかもねえ。

デデデ…デデデデデ

デデデデデ…！

デデ…

あー、はいはい。

いい加減分かってるよ。

…前の自分に触れようとするのノイズ大きくなるもんなあ。

理由までは…しらねー。

ってか、動かないな体。

何か熱いし。

…あー、変な夢と関係してんのかなあ。
狂った元美人にザックリ刺される夢。

…ちよつと…楽しかったかもなあ。
多分、嘘だけどさ。

あああああああああ！！
分かってるよ！分かってるとも！

あれ、夢じゃない！

まじで痛かったし、怖かったし、ちょーうるさかったし！

ヂヂヂ：

そう、ノイズがうるさいんだよ！

ってか、…何よりも！

人を刺す感覚が一番いやだった！

人を蹴る感覚とか経験したく無かったよ！

…だって、何かゾクゾクしたもん！

ぐにゅって、ザクって、ゴリって。

あー！

違う違う。

僕、そういうキャラじゃない！

…必死？

だって、死活問題だものねえ。

ってか、いい加減動かないかなあ、カラダ。

ヂヂヂヂ…ヂヂ

瞼が開かないとノイズうつさいんですけど。

てか、このノイズどんどんひどくなってるかも。

…気のせいかな？

「あー、よく寝た」

お、声出た。

「残念だけど、夢じゃない。この被害者が」

「つ：あー、何ですか、加害者みたいな口調で被害者って言わないでくださいよ」

おー、毒舌の方のナースさんだ。
久々ー。

…だっけ？

「…あれ？…んー。いたいな」

「そりゃそうでしょう。…腹部に12箇所、右太ももに1箇所、背中に2箇所の刺し傷と、後腹部に大きな斬り傷一つ」

ヂヂ：ヂヂヂヂヂヂ

…あー、そんなこともあったねー。ノイズうつせー。

「…よく死ななかったわね」

「残念そうに言わないでください」

「あ、そうそう、絶対安静にしていってね。動いたら更に入院期間が

延びていずれ私が殺しちゃう」

「…本気？」

「…いや、さすがに嘘」

ですよー。

あー、よかった。

知り合いに殺されるとかまじで勘弁。

「はあ…まったく。ま、ちなみに言っておくと、あのアホは警察に捕まった。…もう一つ言っておくと、君は三日寝ていた」

「…さらっと言いますねえ」

「まあね」

あー、捕まったんだ。

ってことは、一応僕は法律が適用される人間ということかな。

「…あ、裁判とか」

「気にしないでいい。君の膨大な遺産から勝手に弁護士がやっっている」

「あっそ」

へー。

あ、そうそう、ここで僕の自己紹介追加情報。

お父さんの…ヂヂヂヂ…さんと、お…ヂヂヂ…の…ヂヂヂヂ…
さん、実は事故で死んでるらしいよ。

…実感わかないけど。

で、まあー。

…保険金と遺産合わせて4億くらいあるんだなー。

…結構お金持だったのね。

あっは。

僕には使えないけど？

宝くじよりも大きい配当だよ。

…べ、別になしくなんかないんだからっ。

「と、聞いてる？」

「ええ、もちろん」

「そうか、じゃあ遺産の9割は私が貰っておくから」

「言ってませんよね」

「ちっ」

…最悪だなーやっぱりこの人。

でも、こうでなくちゃね。

「あ、それと前の隣の部屋の…来栖」…ヂヂ「さんには感謝しておきなよ。命の恩人だから」

やっぱ、名前だけ聞こえない！。

何、もしかして今後の展開にかかわる重要なファクター！？
…いや、そんな事全く思っていないけど。

「あー、そうですね…前の？」

「…アホになってしまったのね。血まみれの部屋に患者が入れるわけがない」

「ああ、そういえば」

花瓶も割っちゃったし！

…どうでもいいけど。

さすがに血なまぐさいのは嫌だから、助かったよ。

「…と、その来栖さんは隣のベッドだ」

「は？」

なんでー？

「…あの一角は封鎖されている。誰かが死にかけたせいで」

「あのー、僕のせいみたいに言わないでください。そちらの管理責任です」

「…そう…ね」

あー、言いすぎた。

管理責任とか難しい言葉使うべきじゃなかったわー。

「…ま、ようするに、あそこの一角の洗浄が終わるまでは使えない
つてだけ。医者が減った分も補充したしね」

「ほあー、じゃ、そろそろ寝ていいですか？」

「だめ、隣に恩人が居ると言ったばかりでしょう」

「ですよねー。ってか、なんかカーテンカリカリ言ってますし」

…引っ掻かれてるカーテンかわいそー。

こえー、…僕のお財布にお金補充しなきゃ。

「うん、それじゃ、お大事にね」

…ナースさんはスタスタと僕のベッドを後にした。

っていうか、なんかすごく心配そうだったんですけど。
そんなに保護欲そそるかな、僕。

デヂデヂ…カリカリ

あー、なんかノイズに混じって、変な音が。

…気にしたら負け…

「…ランチ」

「…退院したらでいいですか？」

「…今、ホットココアも」

「分かりました」

…あ、お財布空っぽだったっけ。

僕の飲み物も買えねーよ！

ヂヂ…ヂヂ…

おっかしいなー、なんか、一部の女性と話しているとノイズひでー。

「ところで…いつからニックネームがクルルさんに変ったのですか」

「…あつれー？僕の心の声なんですけどー」

「…聞こえました。というより…言っていました」

あつはー、まじかー。

「まじですかあー。…来栖さん」

「無理しなくても結構ですよ」

うるさい、クルクルさんめ。

「ふう…あ、カーテン開けますね」

そういえば、カーテンも開けずに寝ながら会話してたよ僕ら。

シャーと、カーテンが開く。

…もつといい擬音ねーのかな。

なんか、別の音と混同するよ。

ヂヂヂ…ヂヂヂヂ

ノイズはどうでもいいやー。うるさい。

「まあ…やつれた顔」

「嬉しそうに言わないでください」

ひっでー。

「…歩けます?」

「…んー、多分絶対安静なんですけど」

「…肩くらいなら貸せますよ?」

「そんなに行きたいんですか? 僕と」

「そこ強調する必要ありませんから。…奢ってほしただけですよ」

…あれえー？
なんか、変な感じ。

「もしかして、前の僕と知り合い？」

「…いわゆる恋人関係です」

えー？

おい、衝撃の展開すぎ、すぎるんですけど。

恋人？

誰と、誰が？

クルクルさんと？

誰が？…僕が？

ようするに。

クルクルさんと僕が恋人？

え？

ちょ、え？

わきゃあああああ！！

昔の恋人に何見られてんだよ！
ってか、昔の恋人って言い方やだな！

わきゃああ！
もーいい！

ヂヂヂ…ヂヂヂ
だから、もーいい！

ノイズ出そうだからもーいい！って先に言ったんだよ！

「…冗談ですよ」

「あ、冗談じゃないんですね…」

まーじかー。

顔がまじだよー、この人。

「…うふふ」

こええー！

ってか、前の恋人にホットココア奢らせてたのかよこの人。

「…同年代ですっけ」

「同級生です」

「それは嘘ですよね…？」

いや、おいおい、だって…記憶を手繰ってみると。
…あってるか知らないけど。

モモちゃんとクルクルさん初対面っぽかったよね？

「…ばれますか」

「ばれますねえ」

…あー、やっぱ会話しづれー。

だりー。ヂヂヂ…うつせー。

「でも、同級生にはなりますよ…転校するので」

「あっはー、それは本当ですか？」

…面倒くさいことになりそうだなあ。

あー、でも、こういう展開…いいなあ。

ヴァイオレンスな展開…期待してないんだよー。

なんか、あのときのノイズすごいうるさいし。

…すごく、ゾクゾクしたし。

ヂヂヂ…ヂヂ

うそうそ！今のなし！

ノイズに免じて取り消して！

「…くす、じゃあ、…貸しにしておきますね」

「何を…？」

すごく、怖いです。

「恋人を忘れていたことと、命を救ったことと、ホットココアを奢らないことと、散歩に付き合わないこと」

「まってください、ホットココアは奢りましたよね」

「一回だけですよ、私は2回も頼んでいます」

…わーがーまーまー。

でも、きれいだから許しちゃう。

…ってならねーよ！

わがまま言われるのはそんなに嫌いじゃないけどね！
だって、なんか…いいし！

変態？…ちげーよ！

ヂヂ…ヂヂ

ノイズ？…そーだよ！

「なんだか、会話の間隔が広くないですか？」

「気のせいですよー。やだなあー」

あつぶねー。

ヂヂヂヂヂヂ…ヂヂ

自粛しようとしてるところに出てくんな、ノイズ！

もう、ノイズなんか無視してやろう。

ヂヂ：「で」：ヂヂヂヂヂ

…毎回毎回毎回…このパターンかい！

「…全部まとめて」ヂヂ「してくれたら許します」

「意味が分かりません」

いや、比喻とか、冗談とかじゃなくて、本当に。

…ノイズのせいですけど。

「…間接」ヂヂヂ「したくせに…」

…分かつちやいました。

…いや嘘です、分かってません。

分かりませんんん！！

ヂヂ：「してください…」

あー、もしかして、ノイズは僕が聞きたくない言葉も消してるのかな？

…前は消してくれなかったけど。

そのせいで発狂しかけたし！

「…えあー、貴方、言う、意味分らない」

「…してくれないんですか…？」

眼に涙ためてウルウルとか、やめてください。

潤んだ瞳とか、嫌いです…。

…嫌いです！本当です！

ヂヂヂ…ヂヂヂヂ
うるさい！

あ、敬語になってた？動揺してた？…てか、してる？

「ああああ！しません！」

「…意味分かってるじゃないですか」

「もー、いいじゃない、そんな昔のことはー」

「…ぐす」

やめてー！鼻とかすすらないで！

あーああーあー！

ヂヂヂ…ヂヂヂヂ

うるさい！

やっぱり、こういう展開もヤダ！

「…じゃあ、30秒目を瞑っていてください」

「や、だめ、です」

あわわ、あわわわ。

近い近いよ！

なんか、クルクルさんベッドから降りてこっちに近づいてきてるよ！

ヂヂヂ：

うるさい！

あああ！ノイズにかまってる間に僕のベッドに乗ってるよ！

ギシ…とか、やめて、その音！

わきゃあああ！

僕、純情なの！

「そー…」

そっとしておいて！

あう、近い、近い…。

わきゃああああ！って、出た！

何か出た！出た！

魂ー！

ヂヂヂ…ヂヂヂヂ！

ノイズ！そう、うるさい！あー！ー！ー！ー！ー！

あー！

「ふふ…これで許してあげますね」

わきゃあああ！

「あう、あ、ちゅ…あー」

何を言ってるか分からない？

僕もです。

そあ、クルクルさん、その仕草やめて！

唇を舌でちよつと舐めないで！

やあああああ！！！

わきゃあああ！

「…ごちそうさまです」

わきゃあああああああああ！…！

すっげー、大人の余裕？

同年代だロ！

ヂヂヂ…ヂヂヂヂヂ

るーっさい！！

スツット、ベッドから居なくなつて、名残惜しそうにベッドがギシリと鳴つて。

「おやすみなさい」

一言挨拶が聞こえて！

…カーテンシャ—つてなつて、隣から…寝息聞こえてきて。
はええよ！

寝つきいいですね！

わきゃあああ！

あー！

僕は何もしてない！

何も見てない、今何もなかった！

うん！

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

ヂヂ…ヂ

うあー、はー！

…ね、寝よう！

そうだ！

…おや、おやすみ！

…後ろめたいとかないから！

おやすみ！

7頁：学校編開始

…皆大好き学校編スタート！

デデ：デデデデ：

…折角の明るい気分を台無しにしないでよ。

あー、うん。

あの不幸な事故（人為的だけど）から、1ヶ月。
そろそろ、学校へ行くことになりました。

…んー、実はまだお腹とかちよっぴりひきつってるんだけどね。

ついでに、肩とか足とか傷だらけだしねえ。

あっは、いってー。

今回は精神的にじゃなくて、物理的に。

…体育の授業は受けちゃいけないって言われたし。

それって単位とかいうものが危ないんじゃないのかなー？

デデ：デデデデ

ノイズは元気だなあ：ファッ（自主規制）

んー、F a c ●だっけ？ F u c ●だっけ？

英語の成績も良かったはず、なんだけどなあ。

…こういう汚い言葉とは無縁な子だったか。

ヂヂヂ…

ぐあー、やめて、頭痛い。

で、ちなみに退院したのは昨日。

…あー、学校行きたくねー。

ついでに、始業式はとくに終わってるらしいです。
そりゃ、入院してたから出れてないよ。

…やったね！

何が？

もう一つ言っておくと、実は今10時。

学校は9時から。

…あー、遅刻確定ー。

ますます行きたくないなあ。

ニートやってたいなー。

…頭痛いし。

あ、さて、新しく学校編が始まるわけですが…、改めて自己紹介でもしておきましょう。

僕の名前は前川 まえかわ 千知 ちち。

ピッチピチの高校2年生。

…記憶喪失なんだ。

で、んー、ノイズに悩まされる明るい（多分）高校生！

…言っててかなしくなるね。

うん、ちなみに退院のいきさつとかは、すごく手短に終わりそうだけど…省略。

何故って、…思い出したくないしー？

元気な時に思い出してあげるね。

ヂヂヂヂヂヂ…

うるさい。

上から目線ですみませんでした…。

とまあ、自己紹介とかしてみたけど…何回目？

いい加減記憶喪失キャラとか、やめてほしいよね。

…地味に不安だから。

うん。

…学校行くかー。

征服…じゃなくて、制服をちゃんと着てね。

…不安だなあ。

…どれだけ心を抉られるのかな。

あっは、まいいや。

さて、いざゆかん。

…あー、遠いなあ。

やっぱりやめるかな？…いや、行こうか。

モモちゃんとか、待っててくれそうだし。

クルクルさんとか、…会いたくねー。

そうだよ！それが一番の原因だよ！

だってさ、病院でどれだけ気まずかったと思ってるの！

ヂヂ…ヂヂヂヂ

うっせー！ちょっと話してるんだから…邪魔…だ。

うん、そう、気まずかったよ…。

理由？さあ、よく覚えてない。

ともかく気まずかったのさ。

さて、いい加減行こうかー。

壁に話しかけてる変な人と思われたら困るし。
…誰にって言われても、家に自分だけだけど。

広い一軒家に一人だけ。

駅から徒歩10分、学校まで徒歩15分。

良い立地条件だわー。

で？だから？それで？

あー、行こう。

…別に壁に話しかけたりするのが好きな暗い子じゃないんだよ！

つと、制服に着替えた、鞆持った、筆箱入れた、お財布持った、
携帯…あったかな。

ま、とりあえず準備万端…かな。

あー、…行くの？

行くかー、戸閉まりもしっかりして…。

「ガチャン、ガチャガチャ」

擬音を口で言うのって悲しくなりますね。

さて、テクテク…と。

ヂヂヂ…と…は要らない。

歩く歩く、電柱とかスルー、茶色い物体とかスルー。

わざわざ登下校のソロプレイの様子とか解説しても仕方ないね。

さみっしー！

あー、…行きたくない。

つと、もう学校？

え？はやつ。

時間は…つと、…12時？

…不登校の子みたい。

あー、こんな時間に行くのかー。

いーや、いこーつと。

空気読めない子ですけど、何かー？

テクテク…階段登る。

…おお、ここが我が2年E組かあ。

…やっべ、皆お昼ご飯食べてる。

せめて授業しててよ…って今何時?…12時半…。
校門からここまで30分…?へえ。

あー!

いいや、もういい!

ガラリ!

「おはようござい…ます?」

…うっわー。

みんな、何?何?みたいな目でこっち…見て。

うわあ…げんなり。

帰ろ…ってだめか。

あ、先生に挨拶とか忘れてた。自分の席ねーよなー。

ヂヂ…ヂヂヂヂ…

こんなときに出るんじゃない。うっせんだよ。

「おは…よう…」

うっわー…。

「おはよう、千知くん」

…わお、モモちゃん頑張ってるね。

この重い空気の中、必死で…明るく。

自然に。

当たり前のように。

…非日常と塊の僕を受けとめようとしているね。

あっはー。

「えっと…あー…帰るね」

「まってえい！」

…誰？

ってか、やだやだ、この空気。

「まったく、何を当たり前のように帰ろうとしてるのさ。…ほら、こちきなよ」

おーわ、おい…怖いよ。

「…あー、記憶喪失なんだっけ」

「うん」

おっと、意外とすんなり言えた。

ヂヂ…

あー、ノイズさんや、…きおくそーしつという単語は隠さないのね。

「うん、おはよう…ってかこんにちは、だな」

「あー、そうだね。こんにちは」

「こんにちは」

…重い。

「うん、覚えてないだろうけど、一応君の親友だった歩あゆむだよ」

…アユアユか。

っと、そんな事はどうでもいいんだ。

…過去形グサリと来るね。

なんでこの学校に戻ってきたのかな、僕は。
アホくせー。

「ああ…歩…君？…えっと、…改めてよろしく？」

「うん、よろしく」

…固い握手…はしない。

だって男だし。

ヂヂ…ヂ…

ゾクリ…うは、なんか来た。
すっげ…ノイズやな響き。

うあー…。

あー。

っ…あ。

「んーと、ああ君の席はそこ。…おい、どけ柳沢やなぎらわ」

「あいよー」

…お弁当どかす。

罪悪感ー。

「うん…あー、うん…っと、病院どうだった？」

「清潔だったねえ」

…嘘だけどさ。

正直なところ…血なまぐさかった。

うは。そんな入院体験ねーよー。

「あ、っと、そろそろ授業始まっちゃうね。…放課後話聞かせてよ」

「うん…分かった」

あー、あー…分かりたくないー。

ガラリ…っと先生が入ってくる。

ザワザワしていた生徒が鎮まる気配はなく…って、おい。

てきとーに席に戻る。

「それじゃ、授業を始めようか…っと、ころころ…おい」

ん？どしたんだろ。

ってか、先生美人だなあ。

なんか、周りの美人率高いね。

さっすが自称主人公だ。

…あつは、他称してほしいけど。

きっと僕はわき役止まりかな。

「おい、こら…：返事をしろって、前川！」

「えあ？はいっ!？」

驚いたあ！

僕の事呼んでたのかよ！

…ってま、当たり前だけど。

「えあ？じゃない、…遅刻とは、いー度胸だ」

「すみません」

…あやまろー。

うん。

「はー、まったく…：まあ、いいか…：それなりの事情があるわけだし。
ちなみに担任も私だ」

「せ…：先生っ!」

「はいはい、授業を始めるぞ…：ふむ、あー、放課後一番に職員室に
来い」

「…はい」

「さて、始めるか」

おっと、触れないでくれるのかー。

ありがたい先生だ。

…ついでに色々と考えてくれてるのね。

あっは、ちょっと先生の事尊敬ー。

ヂヂ…

うざい。

さーって、ふむ、歴史のお勉強かあ…。

あー、これ知ってる。

…嘘だけどさ。

やっべー、ほぼ分からないや。

あは、まーいいか。

んー…なんのことやら。

あー、意味分からない…。

ふむ、教科書ちんぷんかんぷん。

ノートに何も書いてないし。

…いや、もしかしたら…そうか！蓄光塗料だ！

ノートに腕を丸く置いて…そう、影を作るように。

んで…そこに頭を。

おー、真っ暗。

別に蛍光じゃないのかな？

うん、いやまだよく見ないと分からないや。

もーちよつとよく見よう。

…あー、程よい暗さと、腕が枕になって…眠いなあ。

…おやすみー。

8頁：ほのぼの編開始

ヂヂヂヂヂヂヂヂヂヂ

ヂヂ：ヂ「は、ここまで…」ヂヂ：「前川」ヂヂヂ：

なんかー、単語がいつぱい聞こえる。

あれー？これ夢？

なんか、授業とか聞こえた気がするー。

ざわざわと、人の声。

うっぜー！ー！ー！！

…なんてね、嘘だよ。…本当に嘘だよ？
意味分からなくなりそうだけど。

ヂヂ：「ろ」：ヂヂヂ

ゴツ

…いってー。

何か固いもので頭を叩かれた気がする。

たとえるならー…本？

あ、うー、痛い…けが人なのー。

ゴツ！

…強めに叩かれた。

うー、あー、そっか、ここ学校か。

「…痛い……」

「起きたか？…寝てないでさっさと来い…前川」

「はい…」

あー、痛い…。

ヂヂヂヂ…

…うるさい。

「あ、前川ー。終わったら教室で待ってるからー」

「いや、お前らは掃除終わったらさっさと帰れ…初日から質問攻めにするのか？」

「あ…そうですね。んじゃ、明日聞かせてね。前川」

先生に連れられて、教室を後にする。

…それはそれとして、アユアユー（親友らしい歩くんです、念のため）…君は何で名字で僕を呼ぶのかなー。

自分の事は名前で紹介したくせに。

んー、交友関係がよく分からないぜ？

ま、いいんだけど。

あー、もしかしたら、苗字が鈴木とか佐藤とかなのかな。

鈴木とか佐藤って名前で呼ばれる傾向にあるよね。

あ、ここが職員室かあ。

ふむふむ。…ふつー。

「ほら、こっち」

「あ、はい」

…校長室？

…こーちよーしつ？

…あの黒いソファーがあるよ？

いや、あるんですけど？

なんか、ガラス張りの机とかあるんですけど？

賞状いっぱい！

きゃーーーーー！

「さて、と…前川、うん…よく来た」

「あ、ありがとうございます」

…ダラダラ。

汗別に出てないけど。

ヂヂ…「で」ヂヂヂヂ…「訳だが」

…聞こえねえ。

あー何言ってるのかなー。

推理ターイム。

…分からねー！

「…聞してるか？居眠りくん」

「そのあだ名何ですか？先生」

「的確なあだ名だと思っているが？…後、私の名前は西川^{にしかわ} 礼^{れい}だ」

…メモっとくか！。

頭の隅っこの引出しの奥の方に。

で、…あー、…。

西川先生か。

「…西川先生。…手続きとかは済んでますよね」

「うん。それと…君の様子については触れられたくないだろう？」

「ああ、はい」

「だろうな」

うあー、やっぱりいい先生だー！

西川先生サイコー！

「さて、ついでに自己紹介をしておくと…君のクラスでもある2年E組の担任をやっている」

「なるほど」

「何になるほど…だ。とにかく、明日からは遅刻するなよ？」

「はい、西川先生」

キリッ…ふ、決まった。

…なんて、決める気もなかったけど。

うーん、西川先生黒髪美人なんだなあ。
素敵。

…かなあ？

デデ…「は」デデデ…「来れるかな」

…どーやらこの人の会話もノイズで途切れやすいみたいー。

あっはー。

「ええ、はい」

「…ふむ。耳が遠いようだね」

「分かります？」

「全然」

…頭がいい部類の人か。

ま、どうでもいいんだけど。

平和に暮らせればどうでもいいよ。

「ま、大変だろうが頑張れ」

「はーい」

「よし、帰っていい」

「さようなら」

よし、帰ろう。

我が家が待ってるぞー！

さて、…この高級そうな慣れない校長室を後にしよう。

「…疲れないか？」

…あー、くっそー。

いま、ちょうど、ルンルン気分で扉に手をかけたのに。

後少しで、脱出できたのに。

あーーー！

ヂヂ…

…ヂヂヂ

うっさー。

「…ん？あは、確かに、周りからの質問攻めはつかれますねえ」

「…そういうことじゃないけどな」

…くそー。

あー。

…ばれたのー？

頑張ってんのに。

うー、あー。

いー。

えおー。

「ま、さようなら」

「はい、さようなら」

あーもう。

くっそー！

ばれたのか！

あー！

別に、どうでもいいけどさー。

…ちっ。

…帰ろ。

パタパタ…
玄関まで行って靴を履き替える。

…げた箱にラブレターは無し…チェックよし。

靴に画びょう有り…チェックよし。

…ん？

なーんか、うー？

ま、いいか。

「チチチくん、とうとう学校に来たのですね」

で…でたーーーーー！！

「ああ、来栖さん、こんにちは」

「こんにちは」

あうー！

「チチチチくん、何だか、避けてませんか？」

「そんなことはないです、すよ？」

動揺してる？ してない！

…ってかそういえば、いつからチ（以下略）さんから、チ（やっぱり省略）くんに格上げ？

いや、格下げ？

「…一緒に帰りましょう？」

「えあ、今日はハンバーガーを食べる日なんです」

「じゃあ、一緒に食べましょう？…奢ってくださいね」

自爆したー！

お財布、中身…千円札がいちまーい。

あー、これ、…セット二人分足らんよ。

「えあ…お金が…」

「うふふ、…私はセットだけでいいですよ？」

何がいいですよだ！

あう…くすん。

「じゃあ、行きましょうか」

「…はい」

うー、何で敬語になっるのっかなー？

やっぱり、年上っぽいから？

…画びょういてえ。

捨てよ。…この画びょう。

コロコロ…カツン。

どうでもいい擬音でした。

デデ…

どうでもいいノイズです。

あー、有名なハンバーガー店に到着。

知ってる？原価に対して最も値段が高い商品って、…ポテトなんだよ！

実は、セットって、…お得じゃないんだよ！

飲み物も高いし！

「それじゃあ…席とってますね？」

「はい」

僕に取ってこさせようというのか。

…分かりきってたけど。

「いらっしゃいませー、何に致しますか？」

「…チーズバーガーのセットをひとつ、飲み物はお茶で、サイズはそのままで。…あと、バーガーひとつ」

「かしこまりました。お持ち帰りですか？」

「ここで食べます」

「お会計、780円になります」

「はい」

「お釣りの220円と、レシートになります」

「…なります？…いえ、はい」

「……右手でお待ちください」

「手？」

「…」

楽しい物品購入風景でした。

…嘘だけど。

つい、気になるんだよ！

僕だって日本語適当なくせにさ！

あー、スッキリした。

「お待たせしました」

「お待ちしてました…結構」

「すみません」

「気にしてませんよ？」

あー！

くっそ、うまそうに、ポテトとバーガーとお茶をむさぼりやがって！

…上品だけど！

僕なんざ、バーガーひとつだ！

「…ごちそうさまです」

はええー！

…僕よりも早いよ！

何この早さ！

…見つめられている。

食べづらい。

ヂヂヂ…

…食べる気無くすから。

…とりあえず、食べよ。

「あの…見られると…」

「…？」

分かってやがるよ。

くっそー、いい性格してやがりますな。

とりあえず、完食。

…食った気しない。

「では、帰りましょうか」

「はい」

…あう。

さて、外は明るいですな。

んで、あったかいですな。

…だるー。

「あ、では私はここで」

「はい」

「また明日。チチチくん」

「はい」

「…じー」

俗に言う、じと目。

何が駄目なの？

まあ、返事だろうなあ。

分かりきってるよ。

「…さようなら」

「はい、さようなら」

満面の笑み。

…くっそ、可愛い。

帰ろう、我が家に。

到着…つかまあ…うん。

さみしー。

親居ないのは…なーんでだろー。

…答え、事故で死んだから。

あっさり。

デデ…

うっさい。

あー、疲れた。

何が一番疲れたかって？

…同級生（モモちゃんやクルクルさん含む）との戯れ…じゃなくて。

…西川先生との一瞬のやり取り。

なんてね。

さ、寝よう。

ベッドは二階。

着替えて…めんどくせ。

おやすみ！。

リビングのソファ固いけど、ま、いいか！。

デデ…

死ね！。

9頁::ほのぼの編継続中？

デデ…デピピピ

朝から不快な…ノイズだねえ。
目ざましの音かき消すな、バーカ。

あー、今何時？…7時？

…はあ。

学校間に合っちゃうじゃないか。

なんてね！僕、学校大好き！

ダイシュキ！

…っさー、元気に学校いってみよー。

おー。

…あ、制服のままだったね。

ラッキー。

…ってちげーだろ。

あー、服だけはあるんだよなあ。

制服も…なんか、いっぱい。

なんでー？

ま、理由はそこはかとなく分かるけど。

うあー。

学校…行くか！

その前に！

着替えるか！

よし、やるぞ！

ずるずる…のたのた。

ヂ…

…あ？

よし、お着替え完了。

ネクタイまがつてるー。

…っち。

よし、おっけー。

ん？…おっけーってどっかで聞いたな？

例えば、殺人未遂現場とか。

…気のせいかな？

ま、あとで記憶でも探ってみよう。

そうしよう！

…僕は多分そんな面倒なことしないけど。

さーって、…絶対面倒くさくなるぞー！

ってか、学校で面倒なことが起きるぞー！

ふは、預言者ー。

…行こ。

ぺたぺた。

…じゃないね、すたすた。

おいおい、不登校みたいじゃん。

今何時？

…腕時計ないや、テヘ。

わざとだけど。

タッタッタ：

軽快なリズム…誰の足音だ！？

少なくとも、僕じゃない、絶対に。

「おはよ！」

「…？」

な、なんだこのきれいな声はあつ！

っと、そろそろこのテンションやめようか。

「…千知くん？」

「あ、おはよう。百藻^{もも}さん」

「うん、おはよー」

…なんか最近、音つてものがすごく重要だと思うんだよねえ。

ヂヂ…ヂヂヂヂ

ノイズはどうでもいいや。

「…一緒に行ってもいい？」

「うん、問題ないよー」

そりゃーね、可愛いし。

声、きれいだしー？

隣に並んで歩く。

…何か、手とかつながれ…。

わきゃあああ！

手、ててて！？

おててつーなーいで！？

あっは…笑えないって。

恥ずかしいよ！

「…えへ」

えへ、じゃないよ！

うわー、そんなきれいな声で…うわー！

やばい、萌える！

…いやいや、危ない。

違う違う。燃える、だ。

うん、顔から火が出て燃えてしまいそうだ。

…ただの間違いだよ？

決して…そういうのじゃ…ない！

ヂ…

じゃかあしい！

「んもー、せっかく一緒に行くんだから、何か話そうよ」

可愛いー。

「ん、そだね…んー」

「話しづらいなら、わたしが話しちゃうね…えつとね」ヂヂヂヂヂヂヂヂ…

…ごめん、本文聞こえなかった。

ヂヂヂヂヂヂ…「でさー」…ヂヂヂヂヂヂ…ヂヂ

完全に聞こえないや。

うっぜえええ！！

結構聞きたいのに！

…ちょっとだけ。

ヂヂ…「なんだよー」

もーいいですよ、ふん。

「…聞いてる？」

「もちろん」

「ふーん…あ、そろそろ着いちゃうね」

パツと手を離す。

…か・わ・いー！

ハッ、危ない。

てかー、僕って恋人いるんじゃないっけ？
正確には…いた、かな？

…過去形にしたくないなあ。頑張らねば。

手は話しても並んでは変わらず。
…教室に同時に入る？

のは恥ずかしいので（てか、恥ずかしそうなので）…先にモモチ
ゃんを入らせる。

で、後から侵入。

…僕だけ、侵入。…だってねえ、…空気が僕を受け付けてないもん。

「おはよう、前川」

「ああ、おはよう…歩くん」

「固いなー、打ち解けてこーよ」

うあー、アユアユー！

会いたかったよー！

…今まで忘れてたけど。

「つと、来るの遅いってば…聞きたいことあったのにさあ」

「あー、ごめん」

「ま、いいや…質問されるのいやだろ？」

おお、彼も分かってるタイプか！
やったあ！

…アユアユとは良い交友関係を結べそう…だね！

「おーい、席についてるかー？…よし、前川もいるな」

…先生降臨。

西川先生だー、わー、きゃー。

…顔も見たくねー。

「ふむ、…あー、ホームルームで言うこともないしな。では後は適当に」

おいおい、ホームルームは？

流されちゃった。…クルクルさんはどこいった？

欠席？…んー。

…ってか、先生いないし。

てきとーな。

…僕に通じるものがある。

と、寝ようかなあ。

…まだ早いかな。

ってか、寝たくないんだよねえ…この机で。

…変なラクガキあるしねー。

死ね！。

はい、さくさくと授業とか昼休みとか、終わりました！

…お昼ごはんは購買のパン（売れ残りの梅干しパン）でした。
まっずかった。

お弁当羨ましいなあ。

でも、作るような元気ねーよ。

で、ホームルームも当然適当に終了。

…そろそろ活動開始かなあ。

今日の僕は、一味違うぜ。

…お風呂入り忘れたから、しょっぱそうだ。

ふっけつ！。

いや、まあ…うん。

ちょっとへこんだ。

ヂヂ…

…へこんだ。

すごく。

で、活動活動。

机のラクガキ…消したけど。

…消えなかったけど。

…死ね、は聞き捨てならんよー？

…。

ま、どうでもいいか。

ヂヂ…ヂヂヂヂ…

この腐ったノイズのことも含めて…。

前の僕のがちよつと分かってきたなあ。…なんてね。

…つと、活動開始するには早すぎるな。

まだおひさまが上にある。

…ようするに、明るすぎる。

夜にならないとなあ。

うん。

あー、ここの屋上の鍵開いてるんだっけ？
今時珍しいよね。

さて、…昼寝しに行きますかー。

寝よ寝よ。

じゃ、おやすみー。

暗くなったら起きるね。

デ…デデ…

今日は大人しい方だったね。…でも、消えてなくなっちゃえ。

さあ、おやすみ。

10頁：ほのぼの編終了

ヂヂヂヂヂ：

…ヂ

あー、最近目覚めがいつもノイズによって、だなあ。

…うっざー。

あ、ってか、夜だ。

空が暗い！

んーふふ、…そろそろ活動開始しちゃおー。

んじゃ、行くよ。

ヂ：

…ヂヂヂヂ：

…今、シリアス…ですよ？

うっざいんですけど。

さて、階段を下りてと。

…あっは、2－E…ここだあ。

でも、今はいいや。

…居ないし。

先にやることがあるし。

…ってか、恩人だしなあ。

寝てて忘れかけたけど。

さ、戻ってきたけど…。

何してたかって？…忘れた。

…多分、忘れた。

またやってきました、さっきの教室。

さてさて、居るかなあ？

…居た。」

バーカみたい。

あ、…気付かれた？

…じゃあ、先手でも取るか。

「こんばんはー、何してるのですかな？」

「！」

びくう、みたいなあ？

ク…笑えるわー。

まったく、僕の机の周りで何をごそごそと。

…縦笛とかないよ？

あ、僕女の子じゃないんだっけ。
どーでもいいね。

「…な、何故…？」

「さあ？…ちよつとき、屋上で居眠りしてたら夜になっちゃってね
…で、忘れ物取りに来たんだけど」

…筆箱、…机の中に入れっぱなし。

「ああ、…えっと、あー、机の中？」

「そうそう」

「これか？…ほら、筆箱…投げるよ？」

「うん、…ところでさあ…」

投げる前に…止める。

…僕のものだからねえ、…投げさせないよ。
投げて別にも別に気にしないけど。

「こんな暗闇で何してんの？」

「…ん？ああ、ちょっと」

「ちょっと？あ、筆箱投げて投げて」

「ああ、…ほら」

ヒョイっと、…筆箱が宙に浮く。
…で、空中で止まる。

わけないだろ。

空中で止まったら、一気にSFもののお話に変貌しちゃうよ。

ヂ…ヂヂヂ

そうそう、これはあくまで、ノイズものだよね…ってちげーよ。

なんだこのノリツツコミ。

「サンキュー」

「ず、ずいぶん間があったね」

「気にしないで」

…うん、ま…氣に出来なくするけど。

筆箱を鞆にしまう。

ちょっとまっててねえ？

…今、電気点けるから。

パチッ。

「ちょ、な…何？」

「ん？…電気点けただけ」

「な…なんで？」

…あつは、どうしよつかー。

「んー…バカを探すため？」

「っ！」

おっと、やっとながついたか。

…すでにばれねんだよねえ。

「…な、何を言って」ヂヂヂ…

…ノイズ邪魔。

ま、この一言どうでもいいけどさあ。

「んー？…今更？」

「何のことか…」

「ほーざくなー」

…本当にねー。

黙っとけっつの。

「ねえ、…そろそろ、君が何をしたか言ってあげようかー、…あ、現在進行形かな？」

「な、何を言って…」

「さつきからそればかりだねえ」

…も、めんどくさいな。

あー、あつは。

結構好きな部類の人だったんだけどなあ。

…ちよつと見過ごせないや。

「…ま、アユアユ…じゃないや、歩くん。…君さあ…人としてだめだよーそれ」

「何を言ってるのか…分からないな」

「ん？…歩くんほど頭が良くて分からないの？…ないよねえ」

「っ…」

アユアユ…はあ。

残念だよー。

がっかりだよー。

…もう、あんまり興味無いけど。

ヂ…ヂヂヂ

黙れ。

ヂヂ…「だよ、前川…らしく」ヂヂヂ…

…”らしくない”…か？

あっは、うっせーよ。

ヂヂ…

ノイズもうつせーよ。

なーにをほざいてんのやら。

…はあ。

「な…なあ、うん…僕は何もやってないって」

「あー、僕って一人称やめてよ、被る」

まったく、影が薄くなるだろ。

「…は？」

「いや、こっちの話」

ごめんごめん、唐突過ぎたね。

とまあ、そろそろ飽きたし…本題かなあ。

「いじめっ子」

「な…何を…」

「…いじめっ子」

「うっさい!…僕は何も…」

「いーっじめっこー」

「…っ!うるさいんだよ!」

…あー、っは。

やっぱ、あんまり動揺してないねえ。

…うん、分かってたけどさ。

動揺してる振り、下手だね。

ヂヂ…ヂ「が、いじ」…ヂヂ「て？」

…さあ？

それは知らない。

おっと、分からなかった？

彼はねえ、多分、”誰が、いじめっ子だって？”って、言いたいらんだと思うよ。

…で、それは知らない。

「さあ？」

「ふざけてんのかよ…前川」

「…いや？」

ちよつと、シリアス。

「あー、めんどいから、本題入るね。…毒は駄目だよ、毒は」

「！…なに、何を…言ってる？…ま、前川…」

「…はあ？今更？」

めんどーくせー。

「…だからー、簡単に言うとかさあ…、僕の隣の席に座っている来栖さんの机に毒塗ったよね」

「…なんの…ことだよ？」

…もう、まじでめんどくさい。

ヂ…ヂヂヂヂ…ヂヂ

…お前の出番はもうちょい後。

僕が聞きたくない単語がいっぱい出てくるだろうから、そんなとき活躍してね。

…たまには僕のために働け糞ノイズめ。

「…君、めんどい。…ったく、何の毒かなあ…んー、昏睡状態くらいにはなってるのかなー」

「だから、何を…」

「いい加減、やめたら、演技。全部知ってるの」

もういい、全部言ってるやる。

「朝、西川先生は流しちゃったけど、今日来栖さん休んでるよね。…で、多分一人暮らしで連絡ついてないだけだよね…っと、長文話すの疲れる」

そんなに長くもないかな？

「あ、黙って聞いてね、うざいから」

もういい、切ってしゃべろ。

「ちなみに、昨日は元気そうに帰ってたけど、うん。…家行ったら…死にかけてるし」

「まあ、僕が行くの、遅かったのもあるんだけどね…早く行動したらばれそうだったし」

「え…あ…」

うっさい。

話し中。

「病院行けば…多分平気。…だめなら、ご臨終だけど」

「いや…何の話…？」

だから、人の話は静かに聞け。

「あ、ちなみに家の場所は昨日知ったわけだ。…遅行性の毒使ったのが失敗だね」

「あ「黙れ」」

うるせーよ。

ダメツトケ。

「さーて、…うん。今やってる作業はさあ、後片付けでしょ？机の中を丁寧に拭いて、消毒して」

「何を言って…」

「…でさあ、君のせいで僕の筆箱だめになったじゃないか。ま、手は洗えばいいとして…多分口に含んだらアウトでしょ」

「っ…ちっ！」

「あ、逃げないで聞いてね。まあ、タオルで拭いてるくらいだし、結構安全な毒っぽいね…ひきょう者め」

まったく、自分は安全圏内にいたいのか。

…元美人殺人鬼以下だねえ。

あの人は、…まあ、死ねばいいけど、自分の全てを賭けて僕を殺しに来たよねえ。

…理由までは知らないけど。

ヂヂ…「って」ヂヂ…

そろそろかな。

「うん、…違うって言うならさあ、自分の手とタオル舐めてごらんよ。…そしたら信じるよ」

「っ…くっそ！」

あ、逃げた。

…逃がすか、ばーか。

ってー、走れないんだっけ。
…知るか。

構うもんかー！

命の恩人に報いてやるぜ！

なんか、ちゃらにされたらしいけど。

…僕の記憶にないからノーカンだい！

「くっそ！」ヂヂヂ…「のくせに！」

ほーら、きた。

ヂヂヂ…「やのくせに！」…ヂ

あー、やっぱり。

…どーせ、うん。

僕だって新聞くらいは読むさあ。

…昔のもね。

「は」ヂヂヂ…「のくせに、何言ってんだよ！」

走って逃げる…廊下。

ったく、うるさいなあ。

…その不快なあだ名が本当に僕に適合してるかは、まだ分からないんだよー？

「こっちにくるな！」…ヂヂヂヂ「あ！」

っっー、うっせーな。

黙って走れ。

…追う側の身にもなってみろ。

ヂヂ…

あ、うるさいってば。

っっー…足いってええええ！

バタバタ…

走る走る走る。

逃げる、追う、逃亡、追跡。

疲れた…。

「はあ…ぜえ…くっそ、何で…何で分かったんだよ！」

…やっと立ち止まりやがった。

っと、また屋上かあ。

変な逃げ方。

よっぽど混乱してんだな。

…逃げ場がなくなってきたから、止まったんだね。
僕をどうにかした方が楽だと思って。

「んー？勘」

「うそ言ってんじゃないよ！…畜生！」

あー、だーまーれー。

「正直言うと、君、チラチラ机見すぎ。バレバレだよ？分かる人には分かるの」

「なんだよ…！それ！」

しらねーよ。

分かつちゃったから、しかたないだろ。

「さて、と…どーするー？まだ逃げる？」

「…ぜえ…くっそ、知るかよ！」

叫ぶほど…元気なあ。

こっちは体中悲鳴あげてんのにー。

「…死ね！」

ヒュン！

…飛んできた。

…瓶？

ああ、毒力。

ドクカ。

…おい。

死ぬ死ぬ死ぬ。

いや、どんな毒か知らないけど。

多分、やばい。

あ、当たらないし。

ガッシャアンって小気味いい音。

壁に当たって弾けて…垂れる。

「…あっは」

「くっそがあああ！」

…叫んで、…特攻？

まるで、僕のちょっと前を見てるみたいだ。

…一ヶ月くらい前だっけ。

「はあ…ぜえ」

…なんか、口の中痛い。

…目の周りも痛いし。

頭もガンガン叩きつけられて、痛い。

ってか、乗っかられてるお腹重い。

そこ傷口、痛い。

いっそ、休むな。

…あ、でも負けたら駄目なのか。…こいつを倒して、やっと恩返し？

…っは！

でも、どうしよつか。

…あ、そいや、毒…、…おお、身近。

んー、手届いたー。

「ん…？…あ！」

気づいたな！。

いくよー！

「…っ…えい！」

「ひっ…！」

ほう、目についても駄目なのか。

まあ、目は普通に痛そうだしね。

ヂヂ：「してんだ」：ヂヂ

ああ、また聞こえない。

っつか、やばい、またあのグニユってなるところだった。
よけてくれてありがとー。

ツイデニ、マウントヤメテクレアリガトー。

…今の、何？

ま、いいや。

「わあああああ!」

勇猛果敢、…ちよつと前の（以下省略）

今度は避ける…てか、避けれた。

「はあ…くっそ!」

「…黙れ、糞はそっち」

まったく。

痛いし…最悪。

さて、問題です。

これから僕はどうすればいいでしょうか？

…答えは、決まってるよね。

頑張る。

「な…殴らないでよ」

「うっさいんだよお！…お前は、知りすぎたんだ！」

おい、気どってんじゃねーよ。

お前はただの、…いじめっ子。

…いじめっ子。

「あー、もー、いいから来いよ…」

「死ねよ！」

言葉のレパートリー少ないな、ばーか。

おらああああ！って、叫びながら来るな、怖い。

…怖いってば！

来るなってえ！

あああああ！

横にダッシュ！

逃げれるか？

っと、逃げれそうだ！

「待てってんだよ！」

立場逆転。

僕、追われる側、君、追う側。

やったね、第一の目的、追う側の気持ちを知ってもらって、達成。

疲れるだろ？自由に走れないから。

「つつ…あは…うー」

といっても、疲れてるからやばいけど。

「殺してやる！！」

夜の学校で叫ぶな。

…響く。

ヂヂ…ヂ

つく…反応してる余裕…ない！

つと、我らが教室に到着。

…僕の鞆も置き去りだぜ。
筆箱だけ、とりだす。

「おい…ついたぜ…！」

だから、お前は何の悪役？

古臭いつての。

「く…来るなよ…」

怖いつてば！

「知るかよ…ははは、ほら、行くぜえ！」

だからー、…て、もういいか。

最期くらい、好きにさせてやるよー。

ヂヂ…ヂヂヂヂ…

だから、あれ、何!?

…ま、いいか。
よくないけど。

筆箱から…文房具を取り出す。

…文房具。

本来の用途とは違う使い方をしてごめんなさい。

謝る意味も込めて、ごめんねえ…とさする。

撫でるように、愛でるように、その凶器になりえる、狂気に満ちた文房具をなでなで。

「ははは、死ねえ!」

…ああ、だめだ、あいつもう状況に酔ってるね。

僕もだけどさ!

「おらああ!」

「わあああ!」

今は、僕。

ほら、やる気……出さないとねえ。

ってか、今回落ち着いてるなあ。

…絶対安全な状況での喧嘩って楽し…。

ヂヂヂヂヂヂヂヂ

ヂヂ：ヂヂ！

うあああ、うるせええええ！

[illegible]

あああああああ！！

うわあああ！

うるさい、うるさい！

死ぬ、死ぬって、頭、割れちゃう！

あああ！

何、これ、ああああもう！

って、しまった、前前！

「…あああ！」

来てるって！

ま、いいーけどさー！…！

てか、短時間で色々考えすぎ、馬鹿！？

ザクリ

「…え？…がはっ…あ…いってええええ！」

おっと、無意識に手が出た。

…握りしめられた、…ハサミ。

いー、刺し心地じゃない。

…まじ、悪寒がするね。

ヂ…ヂ…

うっせ…いい加減…頭割れる。

「いってえええ！何、何したんだよおお！」

「叫ぶな、吠える…な。…別に、…ただの仕返し」

あいつのお腹から、引きぬく…ハサミ。

…今頃になって…きったああああ！

ゾクゾクって…うわはあああ！！

気持ち悪い、気持ち悪い！

ああああああああ！！！！！！！！

また、やっちゃった！

まただよ、本当に！

ああああああ！！！！！！！！！！

刺しちゃった、グサリ、グサリ、グサリって、一回だけど！！！！！！！！！！

ぎゃあああああ！！！！！

気持ち悪い！！！！

「いた…い…っ…助け…っ」

「黙れ」

…あー、変な気分…気持ち悪…はきそう。

「がはあ…っ…あ…苦し…なんで…っ」

「んー…？あ、ごめん！…やっぱりあれ、毒だったんだね。…忘れてた」

あー、気持ち悪。

頑張って、明るくふるまってるけど。

…実は結構…きつい。

「…ごめんね…僕がハサミをなでなでしたりしなければ…こんなことには…」

…確信してたけど。

嘘だよ？

「…解毒剤、出せば？…どうせ、あるんでしょ？」

「ひっ…」

言われて思い出したように…瓶を取り出す。

ほんと、卑怯なやつ。

でも、奪い取るなんて、無粋なマネ…しないよ。

瓶をあけようとしてる…アユアユ。

滑稽。

その瓶を叩き落とす。

「がっ…やめ…」

「黙れ」

割れて、広がる…解毒剤。

あーあ、もったいねーなー。

「…どのくらいで助かるのか知らないけど、…舐めれば？」

「ひう…がっ…」

あー、まじで苦しいんだ。

そりゃそうだ、…傷から入ったんだから。

んでも、それを許すほど…お人よしじゃないんだよねえ。

んー、このまま、顔を蹴り飛ばしてもいいんだけど。

…一応、元、親友…っぽいし。

ま、…うん。

イス叩きの刑で勘弁してあげる。

ゴツ！

あー、…つく…あは…気持ち悪。

おええ…あつ。

「っ…ごほっ…」

うえ、なんか、…吐いた。

…あー、そいや食べ忘れてたなあ。
胃液しかでない。

全然スッキリしないし。

手に、…感触…。

あああああああああ！……！！！！！！

また、もう！

ぎゃああ！

気持ち悪い！

はぁ…ず…ぐ…。

ずるずると、壁にもたれかかる…。

ペタリ…座り込む。

「アユアユー、…生きてる？」

どうでもいいけど。

…あ、気絶してるだけっぽいな。

死んでもいいけど。

あー、どうしようかなあ。

事情聴取とか、めんどくせ。

…ま、いやな大人に習おうか。

金で解決。

僕のあしなが弁護士さん、サイコー。

…おっと、忘れてたけど、携帯が鳴っている。
正確には…揺れている。小刻みに。

ポチッ

「はい」

「…来栖…一応、助かったぞ」

「良かったー」

「疲れてるのか」

「まあ」

「…ところで、佐藤は？…どうせ捕まえにいったんだろう？」

「…佐藤？」

「佐藤、歩…違うのか」

ああ、やっぱり、あいつ佐藤って苗字なんだ。

どうでもいいー…おえ。

ヂヂ…ヂ

…またきたなあ、ノイズめ。

「あー、そうですね、…目の前で死にかけてます」

「ふむ、…さすが」ヂヂヂ…

ヂヂヂヂヂ！

警報を鳴らしてる、ノイズノイズノイズ！

ぎゃあああああああああ！！！！！！

ああああああ！

うわああ！

「……、安心しろ、私は気にしてない」

「っは…何を安心ですか？」

「…やっぱり疲れるだろ」

ぐああああああ！

今までで一番でかいダメージだぜええ！！

「さて、ふむ…来栖も一命を取り留めたようだし、…援軍に向かってやる」

「ありがとうございますーす」

精一杯の…明るさ。

あー、おえ。

「…まあ、そこで前川も休むといい。…死ぬなよ」

「死にませんよ」

ブチッ

切られたー。

ってか、眠れる状況じゃねえよ。

…手には毒ついてるし、周りぐちゃぐちゃだし、鼻血出てるし、口の中切れてるし。

人が倒れてるし、毒まみれだし。

アユアユがいじめっ子だって証拠も…まあ、これはどうでもいいか。

もう、恩返しは終わったことだし。

あー、忘れてたけど…僕に対するいじめっ子もいずれ見つけ出さないとなあ。

…画びょうとか、やることが子供だけど。

ってか、いい加減疲れた…眠い。

おい、なんだ結局眠れるのか、僕。

ヂヂ…ヂヂヂヂヂヂ…

もう、慣れたって…でも、うっさいから、消えてね。

おやすみ…。

あ、たまには声に出すかなあ。

ヂヂ…

ちっ、うるさい。

「おや…すみ…」

良い夢見ろよ、いじめられっ子A…てか僕。

後、いじめられっ子B…。

番外編1頁…あの子

…あの子を見ていると…こっちまで辛くなってくる。

疲れる…だろ、あれは。

嘘ついて、嘘ついて。

他人に吐く嘘なら…まだいい。

それは心が疲れない。

ただ…自分に吐く嘘は…疲れる。

疲れるから何…なんて、言わせない。

心が疲れたら…人は死ぬ。

物理的じゃなくとも…死ぬ。

あるいは…物理的にも。

私は…確かにあそこまで自分に嘘を吐いた経験はない。

小さな嘘…軽い誤魔化し程度なら、何度もしている。

自分は悪くない、自分はやってない。

その程度の嘘。…それが本当は嘘だって分かってる。

ただ…あの子は違う。

あの子の吐く嘘は…質が違う。

自分は悪い、けど、気にしない。

本当は心が悲鳴をあげているのに、…気にしていないと、嘘を吐く。

まるで…道化師だ。

顔で笑って、心で泣いて、そんな自分を客観的に見て、心で笑う。

そんな嘘で塗り固められた表面。

表情には、…何も出ない。

あの子の表情は…朗らかといえる。

恥ずかしいと赤くなるし、落ち着いているときは、完全に表情を消す。

恐らく、心の中も：賑やかなことだろう。

自分がどれだけ苦しんでいるか、知らない振りをしながら。

もはや、：知らない振りをしていることすら、気にしないようにしているはず。

それが自分を守る唯一の方法だと、：誤解しているから。

：違うのに、そんな方法：何の意味もないのに。

馬鹿みたいに、信じている。：自分の信念にすらなっているのか
もしれない。

あの子の：最大の嘘は：、あの子自身だ。

記憶を失う前のあの子と、失った後のあの子。

：今のあの子は：多分、前の自分を知っている。

いや、：推理して、恐らく見当がついている。

心の中ですら馬鹿の振りをして、授業では眠っていたが…あの子は頭がいい。

それこそ、私なんかより…ずっと。

ただ、頭がよすぎる。

自分が何をしているのか、理解して、それを消しさせることが出来ている。

…そんなあの子の心は…多分悲鳴をあげてる。

いや、多分ではない…確信。

それがどんな形であの子に現れているかまでは見当がつかない。

…けど、あの子はそれに気がついてる。

気がついてるけど…無視している。

そして…その悲鳴を、歪みを、拒絶している。

…自分の心が壊れかけているたった一つの証拠を…。

拒絶して、ないものとして扱ってる。

愚かだ。

愚か過ぎて…不安になる。

きっと、あの子は…壊れない。

いや、…壊れても大丈夫…と言った方が正しい。

全然大丈夫ではないが…、少なくとも、表面上は大丈夫。

誰も、心配できない。

そして、自分すらも…心配しない。

自分が壊れて、人形のように、心が壊死したとしても。

あの子はあの子のままで居続ける。

…私にあの子を救うことは、恐らくできない。

しかし、…あの子を救いたい。

救うなんて、愚かしい真似かもしれない。

それでも…救いたい。

最も苦しんで、最も傷ついて、最も壊れやすい…あの子を。

…救う方法は見つからない…けど。

少なくとも、守ることは出来る。

世の中から。

あの子が、自分の中だけと向き合えるように。

そのためには…私は努力を惜しまない。

絶対に…守り抜いてみせる。

…あの子は、犯罪者には絶対にならない。

何故なら、法の限界を知っているから。

しかし、…世の中は違う。

あの子の壊れた心では予想できない程、腐敗している。

法なんて関係ない。

秩序のない…世界。

そんな世の中から、あの子を守るためには…あの子がしたことを
全て消し去る必要がある。

本当に必要になる、そのときまで。

…あの子に気づかれた瞬間…この行動は意味を失う。

あの子が傷つかないように…動かなければいけない。

もしかしたら、あの子は…気づいているかもしれない。

…そう考えると、恐ろしい。

私も、もしかしたら…。

あの子を傷つける、要因のひとつかも知れないのだから。

…私は何を考えているのやら。

毎日のように、…こんなことを。

あの子を我が子のように思っている？

…違う。

あの子を…愛している？

…違う。

…言い切れる？

…言い切れ…る。

はず。

なにを馬鹿な事を書いているんだろう。

いつか、これもあの子に見られてしまう日がくるのだろうか。

とにかく、今は動こう。

まずは、…教室の掃除。

いつか訪れる、その日まで…あの子が壊れるその日まで。

…私はあの子を守りぬく。

一度壊れて、…歪みを無くすと信じて。

…私も歪んでいるくせに、…そう、信じて。

11頁：再び病院

ヂヂ…ヂヂヂヂ…

ヂ…

うあー、またノイズで起こされるのか。

…って、あれ？…まだ、夢かあー。

あっは。

ヂヂ…ヂ

最近、ノイズ…ひどいなあ。

なーんでーだろー。

ま、興味ないけどさ。

うん。

あー、夢って認識したら起きれるんだっけ？

…起きれないけど。

あれか、明晰夢ってやつ？

…違うっけ？

ま、いいや。

どうでもいいし、興味無い。

んー、…そろそろ朝かなあ。

いい加減、…疲れたかも。

ヂヂ…ヂ

うっせ。

…ああああ！

疲れたかなあ、うん。

疲れた？ノー。

…疲れた？…いいえ。

疲れたろ？いいえ。

選択肢は、はいと、はいだけだよ！

…はいはい。

…あっは。

気持ち悪。

まーだ、あの感覚残ってる。

…殴る感触、刺す感触。

きーもちわるーいい。

ツピッピ…ピピピピ

「ん…あっは」

目ざましなあ。

デデ…デ

…久々にいい目覚めだと思ったらこれかよ。

くっそー。

次こそは、いい目覚めにしややる！

…次がいつまでであるか知らないけど。

っと、ここ、どこだろ。

…家？

あ、目ざましなったもんね。
そりゃー、家だ。

ってあれ、学校で寝てた気がするー。

顔痛いし…あれ、夢じゃないなあ。

んみー。

ま、いいか、…あっはー。

っと…クルクルさんの様子でも見てこよー。

今日は学校休みだし。
…僕だけ。

ん？ずる休み？

なんのことー？

僕、分からないよ。

…モモちゃんに会うのもいいんだけど…、やっぱりクルクルさが元気が気になるしねえ。

まだ、意識無さそうだけど。

そしたらそしたで、…落書きでもしてあげればいい。

…油性…あ、水性ペン持ってこ。

油性ペンなかったし。

っと、病院に行くには電車に乗る必要があるのかー。

…じゃ、お金出すか。

銀行銀行…あった。

んー？じろじろ見らない、照れるよ。

そんなに珍しい？

顔面腫れてる高校生。

…珍しいか。

よし、2万もあれば、足りるだろうー。

ホットココア50個とか言われても…大丈夫。

181個までなら、対応可能。

…ん？

何でこんなに計算早いんだ？

ヂヂヂ…ヂ

あああ！

うっせ！

気にしないことにした！

めんどくさいし！

さ、いこいこ。

「…ですから、面会は…」

「駄目ですか？」

うあー、この病院融通利かないな。

…ってどこもか。

「…またきたのか！今度は…どんな怪我を！」

うわあああ！

毒舌ナースさん…きたわああ！
懐かしい！

「…ん？…ああ、面会か。…驚かすな」

「知りません、勝手に驚かないでください」

「まったく…ん？…ああ、来栖ね。…面会謝絶チューです」

おあー、根に持ってる？

「…ダメですか？」

「別に？患者の意思って訳でもない。…面会したいなら、ついてくる？」

「ちょ、ちょっと…だめですよ」

…むう、こっちのナースさんは融通が利かないのですよ。

毒舌の人の方が楽でいいなあ。

「…じゃあ、治療。…ほら、きなさい」

「あ、はい」

…ちょっといい人かも。

とか、思ってしまう。

テクテク…無言。

ヂヂヂ…

お呼びじゃない。

「はい、ここが来栖の部屋」

「あ、どーも…」

「…好きなだけ居ていいから。…事が済んだら呼びに來い」

「あいにくと、そんな趣味は」

「冗談冗談、…それと一つ言っておくと、私は別にいつも性格がきついわけではないから」

「あっは、まさか、そんな事」

「…どっちの意味で言ってるのかな?…ま、それじゃ」

「はい」

…あっはー。

「…後はまあ、ベッドの…」

「それじゃ」

…あやうくトラウマがよみがえるところだった！

危ない！

…危険！

すげー、危険！

…さて、入ろう。

静かに…入る。

っと…寝てる？

きれいな…寝顔だなあ。

健全な高校生には毒だよ。

…まったく。

ゾクリ

…ん？今のナニ。

ヂヂ…ヂ

うつせえ！

ふう。

起きないかなあ。

「犯しちゃうぞ」

•
•
•
○

「きやああ、わきやああー！ー！」

ちよ、あああああああ！！！！！！！

自分で言って、自己嫌悪！

わきゃあああ！

何言ってるんだ！

わあああああ！

ヂヂ：ヂヂヂヂヂヂヂ

でて、くんなあああ————！！！！

わきゃあああああ！！！！！！！！

「…構わないですよ」

「わきゃああああ————！！！！」

お、お、起きてたあああ！

「な、あ、た！」

「…何故、貴方は、狸寝入りをしていたの、…ですか？」

何故、分かる。

さすが、…こいび…。

わきゃあああああ！！！！

これ以上、これ以上僕の心を傷つけないでっ！

「…部屋の前で、賑やかな声が聞こえたものですから…少々悪戯心で」

クルクル…さん…め。

「…平気ですか？」

「…ええ、平気だったりします…あ、でもちよつとクラクラと…」

「だ、だいじょう…」

いいかけて、やめる。

…ニヤニヤしてやがるんだもの。

コノ、クソアマ。

まったく、油断も隙もありやしない。

…僕は油断と隙しかない？

まさか。

「うふふ…おや、お財布の中身を入れてきてくれたんですね？」

何故分かるの。

「…え？」

「あら、本当でしたか」

カマかけたのかっ…。

やめてよー、ったくさあ！

…ちよつとテンションおかしいなあ、僕。

あーもー。

「あっは、ま…あね」

「…それじゃあ、ランチにでも誘ってくださる？」

「はいはい、喜んで…って、平気ー？」

おいおい、毒でぶっ倒れてたんだよね？

「ええ…あのナースさんなら許してくれるでしょう」

「ああ、あの人ならねー」

…すごい、納得できた！

さすがだよ、毒舌ナースさん！

「…病院、抜けだしましょうか…ちよつと着替えますね」

「えあ？着替え？…へ？」

ちよ、な、あ、ちよ。

わきゃあああああ！……！！！！！！

ぬ、ぬ、脱ぐなあああ！

「あら、…恋人ですのに」

「…えあ…？」

…。

恋人。

脱ぐ。

…恋人なのに。

…恋人なのに、何故脱ぐことを驚くのですか？

…みごとなすい…っ。

わきゃあああああ！！！！！

もー！こんなのはっかり！

わあああ！

ヂ…ヂ…

死ね！

「…冗談ですよ？…ほら、実は中にお洋服着てます」

「…やめて、その冗談、笑えないですから…」

いや、まじで。

ヂ…ヂヂヂヂヂ…「な」…ヂ「に」

…意味分らないー。

さすがの僕にも、推理、無理。

さすがの僕？

…それは頭のいい人が使う言葉だよ？

前の僕ならともかく…今の僕は頭が悪いと授業でさんざん分かったはず。

…れれー？

ま、いい。

「それでは、行きましょう？」

「…はーい」

…あ、れ…？

なんか、眠い…。

うあー、意味分らない。

くあ、ちょ、なんで…。

くらくら、する。

…え？

「大丈夫…ですか！？」

「平気、へい…」

ねむ…い。

ヂヂ…ヂヂヂヂ
うっさい、眠い。

ああ、そうか、…。

疲れたか。

さすがに…ね。

…あんまり、寝てないし。

…安眠できてないし…。

あ、ごめんね、クルクルさん。

…寝ちゃう。

「きゃっ…」

ぽふっ

…って、音がした気がした。

12頁：明晰夢

…おや、ノイズが聞こえないぞ？

変だなー。

…なんか、気味悪い。

ノイズがないなんて…嬉し過ぎて怖いよ。

あっは、…まじで？

…。

「ヂヂヂヂヂヂヂヂ」

あー、うん、口で言ってみても…それっぽくないなー。

…でもさ、ノイズがないなんて幸せな状況が起きたら怖いんだけど。

だってほら、…幸せの後ってほとんど不幸じゃない？

…と、まあ、くだらないこと言うのやめよっかなあ。

ノイズがない理由は、これが夢だから。
証明終了ッ、ビシッ。

…あつは、あー、あれだ、うん。

明晰夢ってやつですっけ？

…多分。

んー。

真面目にいつてみようか。

いい加減怖くなってきたな、色々と。

…気づきかけている人もいる。

最も、真実を知るような人は出さないつもりだけど。

西川先生は…いいとして。

問題は来栖さんだね。

…どうするかな。

最悪、逃げればいいか。

どうせ、気づけないだろうけど。

百藻さんは何も分かってないからある意味安心できる。

…ちよつと邪魔だけど。

後、周りに犯罪者と犯罪者予備軍が多すぎる。

…理由は知ってるけど。

さて、…頑張るか。

僕と、僕の大切な……”もの”を守るために。

…あつは。

ちょっと真面目にするのつかーれーるー。

んー、とりあえず、毎晩明晰夢なんて見てるから、疲れるんだよねー。

ってか、いい加減体力回復しないとやばいなあ。

現実の人間だし？ポーションとかないし？

ねー。

…って誰に同意求めたんだ。

あー、ま、いつか。

なんとかなるらろー。

らろーん。

ふう。

…絶対守ってやる。

13頁：日常の壊し方

ヂヂ…ヂヂヂヂ…

あう、うるさー。

ヂ…

うっせ、つってん、だろ。

あー、頭痛いー。

あ、間違えた。…頭が頭痛で痛いー。

だっけか？

はあ、何か、痛い。

頭の中は激痛、外はなんかいい感じ。

…これだーれだ。

正解は…なんだろうね。

ヂ：ヂヂヂ

はい、ノイズさんは存在自体が不正解だから二度と出てくるな！。

あー、んー。

このまま寝てるかなー。

…いいよねえ。

だよねえ。

うん。

いーいーよーねー。

「起きてますね？」

んー？

何やら頭上から声が。

「…えい」

グサ、…うあー頭のとっぺんに刺激がッ。

例えばそうだな…つむじをつつかれたような。
って、まんまだなあ…。

あっは。

あーあ、うー、…何回つつく気ですか。

えい、グサ、えい、グサ、えい、グサ。

「あ…あの…下痢なっちゃうのでやめてください」

「単なる迷信ですよ、気にせずに」

…うー。

「チチチさんこそ、人を枕、にしないでください」

一瞬声が裏返ったようない？
…そこまで重いのか、僕。

「はて、枕とな？」

「重いです、暑苦しいです」

あー、同感。

…まあ、今の状態に気がついたら脳が終わりそうだから無視するけど。

ふっ、逃げたのではない。戦略的撤退というやつだ。

デ…デデデ

うっさい。…あー、気分台無しだよ。

…なんの気分？

…な、ななな、なんでもないっ。

「おはようございます、来栖さん」

「いえ、残念ですね。現在の時刻は3時です」

「驚きました、おやつはどこですか？」

「…残念ですが、深夜の3時です」

「ん、面会時間ー」

「騒がれても面倒なので、…隠しておきました」

やっさしー。

多分、いい人だあーっ。

「…あ、ちなみに言うんですね。起こしても起きなかったからです」

「ご迷惑おかけしました」

「いえ、こっそり抜け出してどこかへ行ってください」

んー…？

微妙な、違和感。

「…あ、…あっは」

「…どうかしましたか？」

…あー、ておくれ？

うあー。

ちっ。

ヂヂ…

…黙れ。

ヂヂ…「あなたは」…ヂヂヂヂ「じゃなか」…ヂヂ「です」…ヂヂ

うるさい、うるさい、黙れ。

「あなたは」…ヂヂ…「そつきで」ヂヂヂヂ…「で、さら」ヂヂ
頭痛くなるだろ、黙れ。

うるさい。

ヂヂヂヂヂ…ヂヂヂヂヂ

うるさい、うるさい。

聞こえないだろ、聞こえない聞こえない聞こえない。

ああああ！

「あなたは、…」ヂヂヂヂヂヂ「です」

「黙れ！」

ヂヂ…ヂヂ…
うっさい。

「うるさい、黙れ、うるさいんだよ！」

「…哀れですね」

「…あ、これはすみません、まだ夢を見ていたようです」

ヂヂ…ヂヂ…ヂ

あとちょっと、静かに…してろ。

「そうですか」

「ええ、…はい」

…頭…割れるだろ…。

ヂ…

痛い…あ…う…。

ズキズキと、頭に響く、ノイズ。

ああああああ…！！！！

何なんだよ！

はあ…あ。

「…いい加減、やめたらどうですか」

「何のことか、分からないよー？」

「…それが、素ですか」

あっは。

……。

「な、なんのことですか？分らないですけど」

「…子供っぽくふるまってる貴方が本物なんですネ」

「…何のこと？」

…あっは。

まだまだ、セーフ。

まだ、ばれてないや。

「…まあ、どうでもいいことです」

「ですよネ」

「この部屋から出ていってください」

あっは。

おっけー。

ヂ…ヂ…

あっは。

「はい」

扉をあけて、ガラガラ。

…静寂に響き渡る、音。

なんか、懐かしいー。

…クルクルさんが、若干辛そうだったのは…生理か何かかな？

後はまあ、毒の後遺症とか。

気にしたらだめだねっ。

ヂ…ヂ
黙れ。

あっは…あー。

もうちょっと、保てよ…僕の頭。

もうちょっとで、そろそろノイズも聞こえなくなるはずだから。

…あっは。

真っ暗な病院怖いなあ。

早く外出よう。

…外も暗い。

ま、いいか。

外の世界へ…一步踏み出しました！

この一步は、僕にとって、貴重な一步となるだろう！

…あっは。

あー、っは。

っー、頭壊れそう。

…今何してる？

あー、歩いてるか。

…どこを？

横断歩道？

…信号は？
赤。

…車は？

来てる。

あつは。

…あー、死ぬことはないだろ。

多分。

とりあえず、意識不明的なあれかな？

ま、いいや。

ヂ：ヂヂヂ：

ヤバいときくらい静かにね？

：いろんな意味でおやすみ。

14頁：日常は戻らない

ヂヂ…ヂヂヂヂ

針の刺すような痛みが頭に響く。

ヂ…ヂ…

…うるさい。

頭痛い。

あー？

んー。

だが、それ以外の部位に感覚がない。

あー、思いだした。

…うん。

僕、轢かれたんだったね。

あー、生きてるっぽいな。
僕。

…そう、僕はまだ生きているね。

ま、どーでもいいけど。

あっは。

眼を開ける…。

…周りには誰もいない。

ま、当たり前だよねえ。
今まで…変過ぎた。

モモちゃんも、クルクルさんも、西川先生も、ナースさんも。

…みんなやさしかったものねー。

さて、どうするかな。

定番の状況確認？

左手…ギブス、多分骨折…まだ若干麻酔が効いてたり。

右手は、平気っぽいなあ。

…残念ながら、サウスポーなんだけどね。

あ、ついでに点滴刺さってる。

足は…左足が吊るされてる。

うん、折れてるんだろうね。

あー、結構痛くなってきたなあ。

脇腹もちよっと痛いや。

さて、ナンバーも全然見てなかったしなあ。

…赤い…乗用車？

まー、変な色と言えば変な色だけど。

あっは、手がかりあんまりないねー。

ま、事故じゃないだろうけど。

うん。

…あー、どうするかなあ。

体、重い。

ヂヂ…ヂ…

あっは、結構静かになってきたね、ノイズ。

…そろそろかー。

っちくっしょー。

…まだ、やり残したことがあるんだよね。

全てを元通りにするには、少し早い。

少し?…いや、だいぶ。

あーうー、なんか、じわじわ痛くなってきたー。

頭もなんか包帯巻かれてるし。

んー。

どうしようかな。

デ…

あ、ノイズ止まった。

…静寂。

久々ー。

夢以来だね。

あー、何。

時間ないかんじ？

おっけ。

…まだ、麻酔効いてるしね。…いけるだろー。

左足をちょっと浮かす…、よし外れた。
ボスツと、ベッドに足が落ちる、痛い。

…そのまま、落ちる。
ベッドの下に。

ついでに、点滴抜けた。

すっげー、痛い。

あっは、なんかこの感覚も懐かしいな。

あー、よし、行こう。

ずりずり…這いつくばって進む。
何で…？

…それはね、もうちょっとだけ頑張るためだよ。

何自問自答してんだろ、きもちわるっ。

おっけ、扉ー。

…右手で頑張って開ける。

スライド式っていいね。

結構距離があるけど、行かなくちゃ。

ずりずり…EXITの明かりを頼りに進む。

さて、ここが関門だなあ…。
…階段。

がんばろ。

12段だし。

よいしょ、よいしょ。

ズズズズ…。
ずり落ちた、すごい痛い。

何度かチャレンジしてたら、右手の爪剥がれちゃった。
…人差し指痛い。

もっかいいくぜー？

よいしょ。

左手を段にかける、右手を同じ段にかける。

体をひっぱりあげるようにして、右足を下の段にかける。

体を伸ばして、左手と右手を上段に。

左足？放置だよ、そんなの。

あー、ついた。

扉…ああ。

手すりにつかまる。

よいしょ…。

おお、立てた。

扉を開ける…踏ん張ったら落ちそうになった。

…やってきました、屋上！

痛い。

…こけた。

はあ…ふう…。

ちと、疲れたなあ…。
夜風が心地いいや。

眠りたいけど…その前に、最終確認だ。

時計を…って、外されてらー。

んー、どうするかなあ。

ってか、こけたままできるとちよっと寒い。

壁によりかかって座る。

フェンスの鉄の感じが妙に心地いい。

…あっは、マゾ？

さーて、うん。

車に轢かれて、…あー、なるほど。
結構点滴の後がいっぱいある。

んー、だいぶ寝てみたいだね。

…どうりで、心配してる人が見えなかったわけだ。

っつ…。

もしかしたら、来ないかなあ。

…くるよね？

来るよねえ、まだ終わってないもん。

…まだ、終わってないもん…ねえ。

眠い…うあー。

…ふう。

ったく、…はあ。

どうしてみんな、ありのままの、記憶喪失した僕を受けとめてくれないのかなー？

…右手が血まみれ…床に塗ってダイイングメッセージごっこ。
って、ばかなことやめよっかー。

うん。

あっは。

ったく、この町の人皆病んでるよなあ。

…あー、ネタバレしたい気分。

ダイイングメッセージにねー、何で、この町で、この短い期間で、犯罪が…。

…息継ぎ。

っと、どこからだ…？…ああ、犯罪が…多いのか、その理由を、書いてみました。

…あっは。

寝よ。

おやすみー。

15頁：真実と魔法

んー、いい目覚め。

ノイズのないってのはいいね。

あっはー。

ガチャリ…あ、扉が開いた。

ああ、ノックの音で目が覚めたのか。

コツ、コツ…と、靴の音。

近づいてくる。

…違う。

「やあ、…待ってたよー。おはよう」

「…おはよう」

あっは。

…いやー、…あはははは。

見下ろしてくれるねえ…。

僕が座ってるから、だけどさー。

「…これは？」

「ああ、これ？…ちょっと右手怪我しちゃってね、血が出てさー」

「…」

あっはははは。

…ふう。

「…っ」

「どうしたの…？泣いてる？」

「…っ…るさい」

ポタリ、と、垂れる滴。

暗闇に光る…滴。

涙、ってやつだね。

涙かあ。…懐かしいなあ。

「何で、泣いてるのー？」

「…」

眼をこすりながら、…それでも僕を見つめてくる。

…ああ、彼女の眼からは…どこまで知ったのか、分からないや。

「…何で?…ないてるの?」

「…悔しい…っ…から」

悔しい…か。

ああ、…可愛い顔が台無しじゃないか…。

「泣かないでよ…、僕まで辛くなっちゃう」

「っく…」

ああ、…きれいな声が…台無しじゃないか。

「ねえ、泣かないで…? またきれいな声で僕を呼んでよ」

「…っ…千知…くん」

ああ、きれいな声。

…ある意味、待ってたよ。

ぺたりと、僕の横に座り込む。

あー、泣いてる人を見るのは辛いなあ。

「なんで…っ、前の千知くんじゃないのっ…」

グサリ…。

あっは。

…そっか、うん…ノイズはもう鳴らないね。

まるで…歯車の軋むような…、ゼンマイをまきすぎたような…。

ノイズは聞こえないね。

「…ああ、ごめんね」

…よかった、モモちゃんにも…ばれてないみたいだ。

「…なんで…そんなに嘘を吐くの？」

…え？

「…分かってるよ」

あっは…。

ばれた？

「…嘘…？百藻さんに嘘なんて吐いてないよ？」

「もう、…いいよ」

…横を向いて…彼女の顔を見る。

…泣きやんで、まっすぐ僕を見つめている。

あー、ばれたかな？

「ばれた？」

「…うん」

まさかなあ…。

モモちゃんに…ばれるとはなあ。

「なんで…記憶喪失のふりなんて…」

「さあ？…何でだろうね」

あー、ばればれたー。

「…ところで、何で気づいたの？」

「勘…だよ」

「…まさか」

ばかばかしいー。

っー、あっは。

ノイズ…なくなったんだっけ。

あー、きつつ。

頭ぶっこわれちゃうよ。

「答えて…、何で、記憶喪失のまねなんか」

「日常を守るためかな」

…ふう。

「日常…？」

「そう、日常。…僕なりのね。例えばさ、学校帰りに遊ぶとか、授業受けるとか」

「…」

「あとは、…彼女を作るとかさー。…そんな日常」

「…それが、どうして」

…答えなきゃ、だめかなあ。

「あ、ちなみにね…。ちょっと訂正すると、起きた頃は本当に記憶喪失だったんだよ」

「…どういう…」

「自己暗示…で。記憶喪失にね。…ま、ばれちゃったみたいだけど」

「…」

「あと、なんで記憶喪失にわざわざなったか、だね」

「…うん」

「それはねー、…嫌だったんだ。…事件の事を言われるのが」

「…」

…黙って聞いてくれてるのをいいことに、一気に言うかな。

「両親が死んでさー、そのこと言われたくなかったんだ」

「…え？」

「だから…両親が犯罪を犯して死んだことを、言われなくなかったんだよ」

「…もつと言うとき、両親なんか関係ない、自分だけの日常を守りたかったんだ」

…本心に、最も近い…言葉かなあ。

「そう…」

「あつは、…いいね。その…軽蔑した眼」

うん、…もうなんか、慣れた。

「君さ、…僕の事好きだったんでしょ？…僕の両親が犯罪…死ぬまでは」

「…今でもそうだよ」

「嘘だよ。…両親のおかげで、…その日常も、奪われたわけだ」

「…嘘なんか」

「もう、面倒だから、黙って？」

なんか、疲れたー。

体痛いし。

…ってか、うん。

別に、モモちゃんお呼びじゃないんだけどな。

…正直、邪魔…だなあ。

ほんとは…演出のために頑張って仕掛けたんだけどなあ…ま、いいか。

「…ねえ、百藻さん…魔法使って…信じる？」

「え？」

「ほら、こんな風に…火とか出したりさー」

僕が指を鳴らすと、…手の中に火が巻き起こる。

まるで、魔法のように。

…人差し指すっげー痛いけど。

「え、な…あ」

「あとは…ほら、…物を燃やしたりさ…」

その手の中の火を…放り投げる。

…まるで焚火のように、屋上で燃え上がる洗濯物。

それに照らされて、まるで昼間みたいに明るいなー。

「ひ…やだ…え？」

「ねえ…魔法使って…信じる？」

手を…モモちゃんの方に向ける。

…指を鳴らす姿勢をとる…。

「やだ…いや！」

…扉を必死で開けて。

最後に、こっちを、…まるで怪物でも見るような眼で見つめて。

走り去る、モモちゃん。

頑張って逃げるんだよ…僕から。

…追わないけど。

別に恋人関係じゃないしさー。

「さて、早く来てくれるといいなあ…熱いや」

あー、何か忘れてたけど、体動かない。

しかし、モモちゃんもあんなのでよくだまされるなあ。

手の中にマッチとアルコールにつけたハンカチを持ってただけなのになあ。

んー、ばかばかしいや。

ふう。

あー、眠い。

あつは。

やっぱりなあ…無理はよくないや。

ノイズという防衛ラインが消えてから…心が三段飛ばしで衰弱していくよ。

すごい…疲れる。

おや…す…み…。

…あつたかい。

16頁：脱出

揺らめく炎と、伸びた人影。

…やーっと来たね。

「…待ってたよー」

「学校は？」

何を言ってるんだ。

…それも全部あなたが…。

「やだなあ、僕は病院で寝てたんだよ？」

「…寝てるはずの君がどうしてこんなところに？」

「ああ、…ちよつと夜風に当たりたくてさ」

…半分くらいは本当だ。

あっはー。

「ずいぶん、燃えているな」

「…火をつけたからね。…でもまあ、洗濯物だし、そのうち…消えるよ」

「…まだ、正気を保っているのか」

「なんのこと？」

…まだ、壊れるわけにはいかないんだよ。

まだやることがっ…ある。

んー。

「とぼけるな、…前川千知」

「やー、何？西川先生」

「お前を、捕まえに来た」

はて、…僕犯罪したかなあ？

覚えがないよ。

「捕まえる…？」

「…そう、捕まえて、精神病棟に入院させる」

僕が何をしたと！

ま、分かるけど。

「え…や、やだよそんなの！」

「諦めろ…。お前は犯罪を犯さないが…犯罪を招く」

「なんの…こと？」

…んー。

「…なんだ、ノイズだっけか？…ともかく、自己防衛機能は崩壊しているのか」

「なんでそれを？」

「…捕まった医者から話を聞いてね。…犯罪、という言葉にすら反応しないのか」

「まーねー」

結構ばれてるようだねー。

ま、いーけど。

「いい加減諦めろ。…これ以上逃げても、死を招くだけだろ」

「炎をバックにして語らないでくださいよ。…かつこいいからっ」

「ほざくな。…一つ、警告してやる」

「なーに？」

「まだお前は自分の心が壊れかけていると思っているだろうが…な」

「ん…？」

「お前の心はすでに壊れているんだよ」

…は？

まさか、いやいや。

自分のことは自分で分かるさ！。

「諦めて、…入院するんだ」

「…入院？ 隔離の間違いじゃないの」

…あー、こんなことなら轢かれなければ良かった。

逃げがたい。

あうー。

「あ、そうだ…先生、超能力者って…」

「くだらない手品なら、不要だ」

言った瞬間、先生の姿がドアップになった。

…って、近いっ！

近いよ！

逃げる逃げる！

左に転がる…。
痛い！

ゴリッつつた！

あーっ。

手になんか、注射器的なものもってるし！

あー、捕まれば…ふむ。

「逃がすか」

「捕まるか」

…肯定とも、否定ともとれる、言葉達。

もう、言葉遊びの時間は終わりかな？

寝転がっている所を、思い切り蹴飛ばされる。

「あががが」

いってえ…。

うあー。

「…っは、…っっ」

左手で、首を押さえつけられる。

「観念しろ」

「…誰っ…が」

体に体重がかかる。

あー、女性に重いとか言ったらだめだな。

…痛いよ。

左手も、動くか。

…右手を振り回す。
顔面めがけて。

簡単に避けるなよっ。

あっは、教え子の気持ちだぜっ。

「危ないな…無様だ」

僕の右手を足で押さえつけ、右手で注射器をとりだす。

…プスリ。

刺さった、やばいやばい！
けど…今かな？

左手を、思い切り、振りまわす。

「なっ！」

クリティカルヒットオー。

油断してるなあ。

「っ…あ…」

アゴにジャストミートしてみたいだ。

僕から…重みが消える。

「っは…あっは…左利きなんですよ、僕」

どうでもいいけど。

アゴにギブスが当たった衝撃は簡単には抜けないさ。

よろめいて倒れた先生は…動かない。

…死んでるわけではないけど。

右手を振りまわして、注射器を落とす。

その注射器を拾う。

はいつくばって、先生に近寄る。

…左手に、刺す。

注入！。

何の薬か知らないけど。

…睡眠薬かな？

「じゃあ、先生…またね。…おやすみ」

さ、いこう。

体も大分動くようになってきたし。

ただ…ちょっと眠くなってきた…さっき少し薬が入っちゃったみたいだね。

右手を頼りに、体を起こす。

壁を使って、立つ。

「さ、いこー」

片足けんけんじゃんぷってやつさ。

階段だってなんのそのっ。

…落ちた、痛い。

あー、頭からちよつと血出た。

ま、そのうち治るかな。

もう一度立って、右足だけで歩く。

疲れるよ。

自分の病室に戻り、道具を探す。

「えーつと、どこかな…」

あ、あった。

とりあえず、松葉杖とー、あと、いろいろ。

よし、行こう。

…その前に、ちょっとだけ、寝るべきかな。

また轢かれたらやだし。

おやすみ。

17頁：かくれんぼ

ん…体痛いな！。

とりあえず、起きよ。

あつは、よかった…まだ大丈夫みたい。

松葉杖を使って、病院の外へと出る。

今の時間わかんないや。

とりあえずー、夜。

「チチチチチさん」

呼ばれた？

いや、僕の名前は千知だけど。

…でも、呼ばれたと思うなあ。

信号待ちして正解だったね。

「…呼んだ？」

「ええ、呼びました」

…なんだか、また知り合いに会っちゃった。

クルクルさんか…。

「んー、…全部知ってる？」

「…はい。貴方が記憶喪失でないことも、現状も…全て聞きました」

「やっぱりそっかー」

ここまでは、予想どおりかな。

「…百藻さんと、西川先生はどちらに？」

「ん？…会わなかったけど？」

「その回答は不適切です。…貴方はやっぱりと言ったのですから」

「え？…どうということー？」

「聞きました、にたいしてやっぱり…つまり、貴方は他に知っている人がいる事を知っていることになります」

「…あらー、ミスっちゃったなあ」

むう…なかなか鋭い。

「また、まだあの二人と会っていないのならば、貴方が病院を出る必要性がありません」

…んー。

「鋭いね」

「もう、敬語の仮面はやめましたか」

「うん」

だって、無意味なもの。

あっは。

「…で、来栖さんも僕を捕まえに来たのかな？」

「おおよそ、その推理であっています」

おおよそ、ね。

「あ、信号変わるね」

二人並んで歩きだす。

…もともと、僕は右足と松葉杖だけ、しかも片方だから、変な歩き方だけ。

「…」

「…」

無言。

あつは…ここまでは…まだ大丈夫。

「で、どうやって捕まえるつもり？」

「…貴方が私に会おうとしていることも知っています…その理由も」

「理由って？」

んー、なんのことやらー。

「貴方が記憶喪失ではない、という事を知っている人を、説得…するためですね」

「断定するね」

「事実ですから」

…あつは、テレパシー能力でもあるのかな？

よく知らないけど。

「で、どうやって？」

「簡単な話です。…あなたの土俵からあなたを外せばいいのです」

「よく意味が分からないんだけども」

「…賭けをしませんか？」

「ああ、なるほどねえ」

言いたいことは分かった。

…僕がそれにのるかは知らないけど。

ってかクルクルさん優しいなあ、僕に歩調を合わせてくれる。

「もはや、あなたに勝負事で勝てるとは思えません…喧嘩もしかりです」

「それで？」

「ですので、最も私の勝てる確率の高い土俵で戦って貰います」

「僕がそれにのるとでも？」

「のらなければ、逃げるだけです」

ま、だろうねー。

足の速さで勝てるわけがないし。

…今の僕じゃ、無理だしな！。

「で、どんな賭け？」

「私が勝てば、貴方は大人しく入院する。…貴方が勝てば、お好きにどうぞ」

「…内容は？」

「かくれんぼです」

「かくれんぼ、か」

「はい。…私が学校のどこかに隠れますので…24時間以内に私を見つけてください」

「…なるほど…ちなみに今の時間は？」

「深夜1時です」

はー、なるほどー…考えやがったな！。

「実質制限時間は…3時間と4時間ってところかな」

「何をおっしゃっているのかよく分かりませんが、24時間です」

よく言うよ。

どうせ、24時間全て使わせる気なんてないくせに。

ま…分かってたけど。

っと、学校が見えてきた。

…結構長い時間喋ってたんだなあ。
右足つりそうだよ。

「…では、隠れさせていただきます…深夜2時にスタートと致しましょう」

「あ、時計貸してくれない？」

「どうぞ」

そういつて、腕時計を僕の右手につけてくれる。

「では」

「健闘を」

「祈りません、私が勝ちます」

「…頑張って」

そういつて、クルクルさんは学校の門を乗り越えて、振りかえることなく学校へ入った。

…背筋伸ばしてかっこいいー。

はー。

んー、あっは。

…簡単なゲーム…にはなりそうもないなあ。

結構手ごわいぜ、あの人。

逃げ場の少ない屋上にやって来てくれた二人とは大違いだ。

…むう。

ま、いいや…。

2時まで寝るとしようかな。

おやすみ。

検討を祈るよ、クルクルさん。

頑張っ
て、
…勝
つて
ね。

番外編2頁：隠れる私と探す彼

どこに隠れよう…。

正直、どこに隠れても…。

彼なら私を見つけてしまうのではないか。

…と、思う。

いや、…期待している。
見つけられることを。

…正直…見つけてほしい。

私が必死になって考えた隠れ場所を…見透かしてほしい。

倒錯した愛情みたいに…。

彼に見つけてもらえたら…。

それはどんなにうれしい事なのだろう。
もしかしたら…目的なんて忘れてしまうかもしれない。

いや…すでにこの遊びそのものが…目的になっている。

彼に見つけてもらいたい…。

でも…彼のために…。

見つかるわけにはいかない。

さて…どこに隠れよう。

候補はいくつかある。

ダミーの隠れ場所もいくつか作った。

そして、本当の隠れ場所となりえる場所…を三つ。

さあ…どこにしよう。

…ああ、今すごく気になってしまった。

百藻さんも、西川先生も、私も。

…みんな学校を休んでしまう。

まあ、…きっと気にする人は…あまりいなければ。

隠れ場所として…大事なことは、私が誰にも見つからないこと。

当たり前だけど…そうじゃない。

その隠れ場所が誰にも見つかってはいけないのではない。

…私が誰かに見つかる場所ではいけない。

むしろ、隠れ場所は…誰かに見つかるべき。

そうすれば…。

たとえば勝負に負けたとしても…。

彼を救うことは出来るのだから。

そう考えると…やはり最初から隠れ場所は一つしかない。

ここ…。

さあ、彼を待とう。

24時間…じつくりと、待ち続けよう。

彼を救うために。

18頁..かくれんぼの秘密

…頭が痛い。

くそう…そろそろ限界…？

やだなあ。

えーと…時間は…4時？

寝坊してしまったか。

…ま、どうでもいいけどさー。

あっは、いくよ。

…って、左手左足骨折してる僕がどうやって学校の中に入ればいいんだろう。

まず…門をよじのぼ…無理じゃないかつ！

しまった…それが狙いだっただのか、…クルクルさんめ。

僕もつかれてるみたいだ。

3＋4時間…本当は4＋4時間だけど…いろんなロスタイムを考慮してそう言ったけど…。

違った。…制限時間は0時間…？

絶対有利…か。

あっは、…確かになあ。…探す時間がなければ…勝てないね。

しばらく…門を眺める。

人通りは皆無と言ってもいいけど…一応、隠れる必要はあるよなあ…。

見つけたらゲームオーバーだし。

はあ…。

やってくれたな…クルクルさんめ。

しかたない。

ちよっとリスクは大きいけど…昼間入ろう。

遅刻した哀れな人のために、…門は開いてるはずだから。

ふう…。

さて、この余りある時間でどこかに僕も隠れないとね。

見つかってしまっは…元も子もない。

…まったく、鬼が隠れるかくれんぼなんて聞いたことがないよ。

とりあえず…植木の中にでも入ってようかな。

学校の正門のあたりに…つつじか何かが植えてある。

…まあ、多分ばれないでしょー。

寝転がるようにして、木の合間に入りこむ。

…意外と外が見えないね。…これなら大丈夫かなあ。

後は…タイミングだ。

どのタイミングで行けば…見つからずに中に入れるか。

…ミスったらゲームオーバーだけどさ。

くっそう…こっちの敗北条件が多すぎて困るぜ。

負ける気は…全くないけど。

はあ…。

…っ…あー…頭痛いー。

いい加減…やばいなあ。

ってか、何か頭クラクラするし。

…軽く貧血？

はは…。

土が冷たくて心地いいや。

まるで、死んだ気分だよ。

…ま、もう少し頑張って生きてやる。

僕のために。…そう、僕のために。

…何か、目的間違えてるような？

気のせいだよねえ。

あつは、…寝ようかな。

おやすみ、…うん。

19頁：探索

…今は…13時…か。

まあ、ちょうどいいかなあ…。

つか、見つかるの怖いなあ…。

今更何を怖がるんだって話だけど。

…いいや、行こう。

植木から、頭を出す…周りに人はいない。

おっけー、サクっと中行こうか。

どこから見て回ろうかなあ…、って違うんだよ。

もう、そんな余裕はないんだー。

とりあえず、ここ見つかりやすそうだから…校舎内には入ろうかな。

玄関…あ、そういえば足すごく痛い…裸足で来てたね。

…落ち着いて僕の姿を見てみればさあ…もはやゾンビだね。

左手左足のギブスは土で汚れて、来ている患者服も土まみれ、血まみれで。

右手と頭に血がついて…恐らく目にくま出来てるだろうし。

…確実にやつれてるし。

僕が見たら…怖がっちゃうよ。

鏡にも気をつけよっと。

さて、どこに行こうか…ああ、掃除用具室がいいか。

…今日は日差しがやたらと強くて暑いけど…まあいいかな。

とりあえず、掃除用具室に行ってみる。

…裸足はちょっと便利かもなあ。…土払っから形跡残らないし。

何より、片足で跳んでも足音がしない…これは大きいね。

…掃除用具室に、人はいないと思ったんだけどなあ。

扉を開けてみたら…なんか男女のペアがいるよ。

何してるかは…割愛。

「え…いや…いや…っ！ごめんなさい！」

男女の女の方が…ひどく困惑して、喚き散らす。

…まあ、声は聞こえ無さそうだけど。

男の方は…ぼーっとしている。…訳が分かってないんだろうなあ。

そりゃそうだ、こんな姿の人間がいきなり現れたんだから。

…とりあえず、中に入って、後ろ手に扉を閉める。

…ごほん、あーあー…心の中ででやっても無駄だけど。

「出て行け…早く」

精一杯の低い声を出す。

「…は、はい…わ、わか、分かりましたっ」

男の方は半泣きで…女の方を抱えて出て行った。

んーむ、意外と効果あったね。

…ま、僕がここにいる事をあのペアは言わないだろうなあ。

自分たちが何してたか、聞かれちゃうし。

さて、鍵をかけられない…からなあ。

さらに隠れておかないと、不安だよ。

…ん？…隠れ場所が用意されてる。

木材が積み重なった中に、棺桶みたいな長方形の箱が隠れていた。

…ああ、そういうこと。

クルクルさんに、ちょっとだけ感謝しようかなあ。

…とりあえず、…そこに隠れるとしよう。

中にゾンビいたら怖いけど…僕も似たようなもんだから気にしない。
い。

木材をどけてしまわないように、…木箱の蓋を少しだけ開ける。

…少しできた隙間から、中に入る。

よし、侵入成功。

ああ、疲れたなあ…うん。

寝ようかと思う。

…寝ようかと思っていたら、何やら扉が開いた。

ちよつと心臓どきどきだなあ。

「…ねえ、大丈夫？」

女の子の声…？…なんか、すごい、すごい嫌な予感だ。

…この学校そこまで腐ってるのかなあ。

「大丈夫だって…今まで見つかった奴なんかないんだから」

さっき居たけどね。

あー、この棺桶居心地いいなあ、…体にフィットするよ。

…ってか、場所的には居心地悪いんだけど。

何、この聞き耳たててる変態みたいなポジション。

お前らのナニでアレでソレなんて要らない。

わきゃあああああ！こら、こんなところで始めるな！

やめるんだ！…やめてっ！

ってか、女の子の方も断れよ！

あー！もう！

…やっぱ、この学校腐ってるみたいだ。

ちゃんど、…いや、やめとこ。

そんな余裕はないしね。

はー…寝よう。

おやすみ…黙れ、いい加減黙れ。

うるさい…もう、変なこと始めるなよなあ…。

…おやすみ。

20頁：最期、ではなく最後

木箱の蓋を少しだけ開け…辺りの様子をうかがう。

声は…しない。

ついでに真っ暗だ。

さて、ここから出ようか。

「あいたたた…」

思わず声を出してしまうほど痛いや。

木箱を出ようとしたら…転がるように出ってしまったものなあ。

幸い体の右から落ちたけれども…すごく痛かった。響いた！

そういえば、思いだしたけど…僕時計持ってるじゃないか。

寝ぼけてるかなー？

時間は…十一時ちょうど、か。

まあ、ちょうどいい時間かなあ。

重い体をひきずりながら、学校中を探しまわる。

…無駄かもしれないけど。

一階は…誰もいない、二階も…しかり。

いや、居るには居たけど…居眠りしている警備員さんだけ。

とか言うと警備員さんがまじめに仕事していない風に思われてしまふかな？

ちよつと訂正しよう。…居眠りしている誰か知らない人が校舎内にいた。

…あれ、これでもまじめに仕事していない風かな？

ま、いいや。

とりあえず、クルクルさんの隠れ場所を思いついてしまったので…行こうか。

今の時間を確認すると…十一時かなあ、暗くてよく見えないけど。体を引きずりながら、松葉杖だけに頼って歩く。

ぺた、ごつ、ぺた、ごつ。

スリッパと、ギブスのアンサンブル。

目指す先は…屋上。

階段は…なんだか慣れてきた。

痛みもほとんどしなくなったし。

屋上への扉を引く…。

思ったとおり、夜だというのに鍵がかかっていない。

…寒かっただろうになあ。

ともかく、屋上に侵入…あれ、校舎から出たことになるのかな？
まあいいや。

「やあー、クルクルさん！見つけたよー？」

目の前に…彼女が。

いや、別にいないけど。

…声すら聞こえてこない。

「ああ、探せてことね。…まあいいや」

…と、フェンスの向こう側に人影が見える。

座ってる…？

本当に屋上にいるとは思わなかったなあ。

何故この屋上を選んだのかは…よく分からないけど。

隠れるに適した場所はもっとあったはず。

鍵がかかる場所ならば、僕が入れないのだから…確実な勝利だろうに。

「もう一度言う、見つけたよ？」

「…」

フェンスの向こうから返ってくるのは…無言。

ともかく、彼女に近づいていく…人違いは、多分ない。

「あ、そういえばそっちにどうやっていったの？…このフェンスやたら高いけど」

「そこの穴からですよ」

…返事があった。

逆に驚きだ！

「…ほんとだ、こんな穴あったんだねえ…」

人がかがんで通れる程度の穴。

僕も…フェンスの向こう側の世界へ旅立とうかな。

…クルクルさんの隣に立つ。

あっは、クルクルさんが小さく見えるー。

「さて、…現在の時刻は十一時二十二分、僕の勝ちだけど？」

「そうですね」

「…来栖さん隠れてすらいないけど？」

「そうですねえ…」

「ああ、そうか。…最初からかくれんぼは、無意味だったのね」

…僕もクルスさんの隣に座る。

足を放り投げる形で…屋上の端っこに座る。学校の屋上は…やたら高い。

こえええええ！！

「はい。…あなたが誰かに見つければいいな、とは思っていましたが」

「なるほどなるほど。…で、…かくれんぼのルールとして君は僕に従うべきなんだけど」

「…どうせあなたも従う気なんてなかったでしょう？」

「まーね」

足をブラブラさせてみる。…落ちそうで怖いけど。

「ちなみに、何故記憶喪失のふりなんて？」

「んー？…普通の学校生活を送りたかったんだよね。…犯罪者の息子としてでなく、普通の男子生徒、として」

「…あなたらしいですね」

あー、空がきれいだ。

何だかんだで、星がいっぱい。

「で、…どうやって僕を病院送りにするのかな？」

何か怖い表現に聞こえるけど…ようするに僕を捕まえて病院に閉じ込める、と。

「動けないほどに痛めつけて、ですけど？」

「あー、そう。…どうやって？」

彼女はしばし考え込むようなポーズをとり…

「あなたを殺して」

と、にっこり微笑みながら言い放った。

あっは、言うねえ。

殺して…か。

「…まあ、いいけどさあ」

と、ポケットに入れてあったガラス花瓶の破片を取り出す。…病院で拾ってきたんだ。

もちろん、クルクルさんには見られないように…左手に持つ。

「殺す方法も、簡単ですよ？」

左手で破片を固く握りしめる…食い込んで手が切れたけど、気にしない。

「んー、一応これでも何回も死にかけて生きてるんだけどなあ」

「でも…あなたはまるでポリシーみたいに守ってる一つのことがありますから」

ポポポ、ポリシー!?

僕にそんな変なものがあつたのか。…すげえ。

「ポリシーって?」

破片を構える。

…狙いは彼女の右足。…逃げるためにはそれがベストだよねえ。

嘘っぽいかな?

彼女は少し考えるそぶりを見せる…と、いきなり立ち上がった。

そして、

「あなたは人殺しだけはしてませんね。…人の死を見ていない、というのが適切でしょうか」

と、そのままゆらりと、体を揺らし、

こちらにっこり微笑みながら、

そのまま、

体を、

空中に、投げ出す。

「なっ…」

ぞくり、と、背中に何かが。

…あー、あー！！！！

なんで、周りはこんな変なのしか居ないんだろうか！

落ちながら、それでも微笑んでいる彼女に…手を伸ばす。

届け、…ってか届け！

望んでない、こんなの！

手が、届いた。

…気づいたら、僕も落ちているけど。

「ありがとうございます…千知^{ちち}さん」

微笑むのはいいけど、チチチチとかの変な呼び方はどこいった？

まあ、いい。

あーあー！

何だろう、これ。

「死ねよ、来栖さん」

「…なら、殺してみてください」

くだらない会話。

とても、地面が迫ってきているとは考えられない程の、…くだらなさ。

クルクルさんを抱きかかえるようにして…、

僕は、背中から落ちた。

それは、痛いとか、痛くないとか、…そういう問題ではなくて、

体に衝撃が走る。

「…おやすみ…っ、なさい…千知^{ちぢ}…さん」

最期に…ってこの表現ヤダ。

最後に見たのは…クルクルさんの苦しそうな顔。

落ちた衝撃で痛かったのか！。

あっは、…まあいいや。

おやすみ、…みんな。

20頁：最期、ではなく最後（後書き）

これはあくまでもフィクションです。…決して真似をしないようにしてください。…あなたの健康を害する恐れがあります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2201g/>

涙の後に…

2010年11月22日20時45分発行